

41786

教科書文庫

4
810
41-1926
200030
2013

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

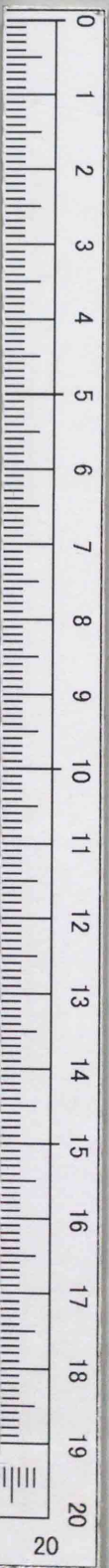
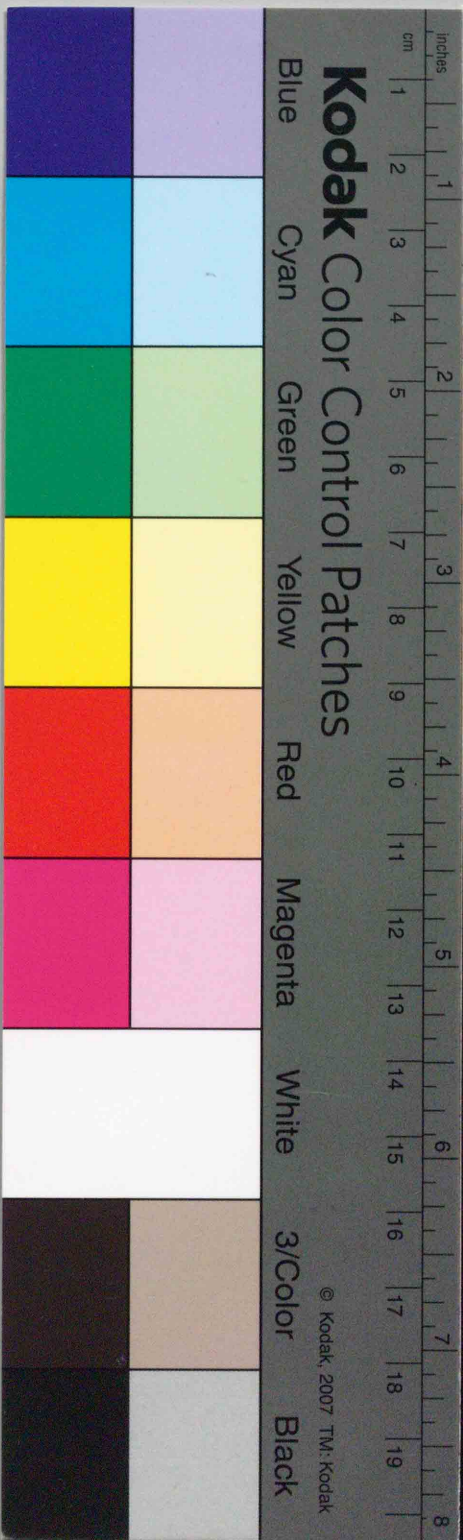


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



41-1926
200030

中國教科書
三卷



教科書文庫
4
810
41-1926
2000302013

資料室

375.9
Y019

廣島縣立
廣島縣立

廣島縣

廣島縣

廣島縣比婆郡

三番市格致中學校

廣島縣比婆郡

三番市格致中學校

廣島縣

格致中學校

第1卷

第1卷

第1卷

第1卷

第1卷

第1卷

no

no no no
no no

no fujitani

Handwritten notes in the bottom right corner.

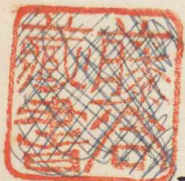
Red stamp or mark at the bottom right.

文 部 省 檢 定 濟
大 正 五 年 二 月 十 日 中 國 語 文 教 科 書

中 國 文 教 科 書

吉 田 彌 平 編

卷 三



東 京

光 風 館 藏 版



Faint bleed-through text and stamps from the reverse side of the page, including '中國文教科書' and '吉田彌平編'.

中國文教科書卷三

目次

一	この春	北原白秋	一頁
二	峠の茶屋	夏目漱石	七
三	潮の岬	杉村廣太郎	三
四	若き希望	一七
五	鋏と小判	加藤武雄	一九
六	鼠	吉村冬彦	五
七	水車	尾上柴舟	三

目次

一



広島大学図書

2000302013



八	訣別……………	廣瀬武夫	四
九	閉塞隊……………	……………	七
一〇	札幌農園……………	菊池幽芳	四
一一	豆……………	……………	五
一二	雨……………	千家元麿	五
一三	貢進生……………	……………	六
一四	杉浦重剛君を弔す……………	穂積陳重	七
一五	東宮御成婚奉祝會……………	永田秀次郎	六
一六	夏の小曲……………	三木露風	六
一七	巴里より……………	島崎藤村	八
一八	平和は成れり……………	近衛文麿	五

一九	九十九里濱……………	徳富健次郎	一〇三
二〇	正覺坊……………	北原白秋	二二
二一	本能寺の夜嵐……………	……………	二九
二二	豊臣太閤……………	三上參次	二六
二三	歌話……………	中邨秋香	二五
二四	君が御蔭……………	……………	二四
二五	利根の上流を……………	菊池寛	四
二六	錦帯橋……………	五十嵐力	二五
二七	日本一……………	新村出	二五
二八	厨子王……………	森林太郎	一六



北原白秋

詩人

名は隆吉

明治十八年福岡

縣柳河町生

こゝ

神奈川縣足柄下

郡小田原町

大地震

大正十二年九月

一日の關東大地

震

お濠端

小田原御用邸の

まはり

もとの小田原城

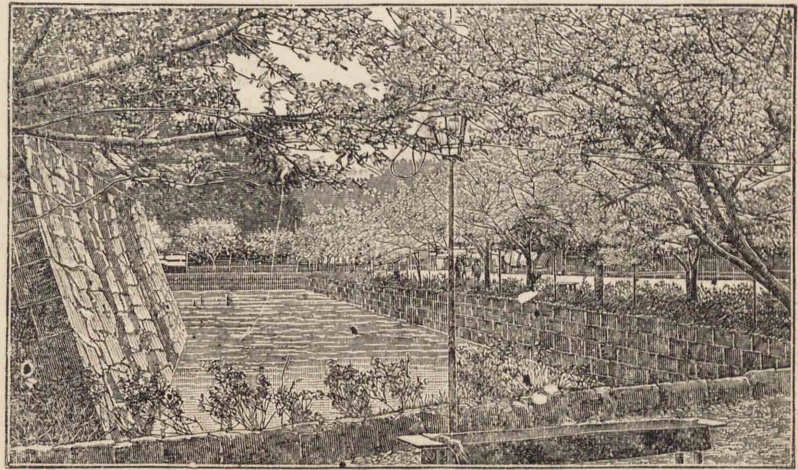
中學國文教科書 卷三

一 この春

北原白秋

こゝに移り住んでから、これほどに、私は、しみじみとした、しかもまた明るい、春らしい春に出逢つたことはない。たゞわづかに五六日しか他行しなかつたのに、歸つて見ると、小田原の町はもう櫻の眞盛りになつてゐた。ことにお濠端の並木などは、あの大地震に崩れつくした石垣の上から、殆ど倒れたまゝで、咲亂れてゐた。ある枝などは、青濁り

天神山
小田原驛の近く
にある小山



小田原御用邸附近

の水にその尖端がとゞいたなりで、既に薄あかく匂ひこぼれてゐた。あるものはまた舊城の枯松や霜焼けした銚杉などと横倒しに喰ひちがつたまゝで、而もおそろしく咲きしらんでゐた。
それよりも、この天神山に登つて、いよゝ私に春の関けたのに驚かされた。

傳肇寺といふ名ばかりのこのバラックの寺の墓地前の櫻も、遅咲きの八重ながら、もうとくに盛りになつて、井戸のそばのくづれた竹垣の上には、紅紫の蘇枋の花が咲出し、うちの木兎の家とのさかひには、また造花のやうに眞紅な緋桃の花が光りかゞやいて、垣根の青い蔭の葉までも、かへつて色濃く引きたくせてゐた。
わたくしは家のはいり口の二本の棕櫚の根方に紅い一輪



木兎の家

アネモネ
西洋草花
の名

のアネモネの花をも見つけた。
而も、それよりもつとわたくしの目を驚かしたのは、家のま
はりの孟宗林の楚々たる姿の薄黄であつた、いや、その下萌
えの深い緑であつた、雨に濡れた白いなづなの花のむらがり
であつた。

ムーンフラワー

Moonflower
西洋草花
の名

いや、まだ驚いたのは、吾が子の顔であつた、姿であつた。急
に目立つてさかしく、大きく見られたことであつた。

コスモス

Cosmos
西洋草花
の名

庭の花壇にはいろ／＼の草の芽生えがひわれて來た。金
蓮花^{ニハレン}、羯鼓菊、向日葵、雛芥子、ムーンフラワー、蒔けるだけ蒔いた
野菜の二葉、それからひとり生えのコスモスや葉雞頭な
どは、もう足の踏場さへもないほど生えつめて來た。

窓の下の山吹にも、ちら／＼と枝の深い方で黄色く綻びる
花も見えだした。南天の實もいよ／＼紅く濕つて見えだ
した。

つい前の隣の小藪には、實に新鮮な蒲公英が數かぎりなく、
朝ごとに咲いては、また寺の子たちに摘まれて了つた。

この裏の別荘の丘にのぼると、そこらはもうつくしんぼの
季節が過ぎて、代りに一面の杉葉が露を綴り、虎杖^{いたご}のやはら
かな嫩芽^{ななめ}、幼い御形蓬^{ごがたむすぶ}、見るもの踏むものごとに、わたくしは
更にもぎ／＼しく、親しい隣の春を楽しまずには居られな
かつた。

つい二三日前の夜には、ころ／＼と蛙の遠音もきこえたや

うであつた。わたくしたちは鍬をとつて、あちらこちらの孟宗の根を掘返しては、まだほの黄色い幼い筍を探しまはつた。

出入りの魚屋が今朝むつの卵を持つて來た。私たちは、それを煮とりたての鱒の刺身をつくらせては、新筍の五目飯に満腹した。

かうしてまた「赤い鳥」の兒童の詩の選をしたり、じやがたら漬をたべたり、ヂヤスタアゼを噛んだりしてゐるのである。さうして今夜もまた徹夜で勉強だぞと懸命である。

(季節の窓)

赤い鳥
少年雑誌の名
ヂヤスタアゼ
澱粉醱酵
Diastase
素
消化藥

二 峠の茶屋

夏目漱石

「おい」と聲を掛けたが、返事がない。軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。向側は見えない。

五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらりふらりと搖れる。下に駄菓子子の箱が三つばかり並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

「おい」とまた聲を掛ける。土間の隅に片寄せてある白の上にふくれて居た雞が驚いて眼をさます。くゝゝ、くゝゝと騒ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて半分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけてある。幸、下は

夏目漱石
名は金之助
文學者
東京の生
大正五年歿
年五十

焚きつけてある。

返事がないから、無斷でずつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。鶏は羽搏きをして臼から飛下りる。今度は疊の上

廻廊の柱の影や
海の月 漱石

廻廊の柱の影や
海の月 漱石

風や海に夕日を
吹き落す 漱石

風や海に夕日を
吹き落す 漱石

へあがつた。障子が締めてなければ、奥まで駈けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこと云ふと、雌が

細い聲でけつこつこつこと云ふ。まるで人を狐キツネか狗イヌのやうに考へてゐるらしい。

床几の上には一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收る。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出た。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈カマドに火は燃えて居る、菓子箱の上に錢が散らばつて居る、線香は吞氣に燻つて居る、どうせ出るには極つてゐる。しかし、自分の見世をあけ放しても苦にならないと見える處が都とは少し違つ

てゐる。返事がないのに、床几に腰をかけていつ迄も待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、嘸御困りでござんしよ。お、お、大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこをもう少し焚附けてくれ、ば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立ちあがりながら、しつくと二聲で雞を追下げる。

こゝこゝと駈出した雌雄は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛出す。

「まあ一つ」と、婆さんはいつの間にか刳拔盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけてある。

「御菓子をと、今度は雞の踏みつけた胡麻ねちと微塵棒を持つて来る。」

婆さんは袖無しの上から襷をかけて、竈の前へうづくまる。余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「生憎今日は――先刻の雨で何處へか逃げました。」

折柄竈のうちがぱちくと鳴つて、赤い火が颯と風を起し

て一尺あまり吹出す。

「さあおあたり。無御寒かろ。」と云ふ。軒端を見ると、青い煙

が突當つて崩れながらに、微かな痕をまだ板庇いすゞにからんで

居る。(漱石全集)

潮の岬

紀伊の南端の岬

杉村廣太郎

號は楚人冠

新聞記者

明治五年和歌山

縣生

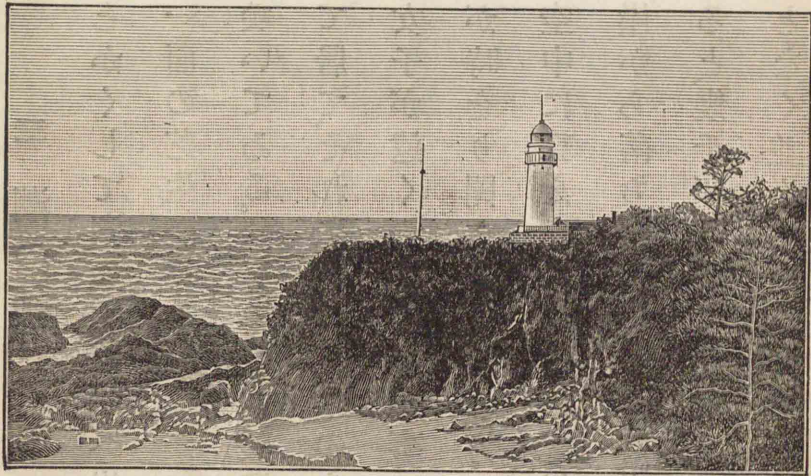
三 潮の岬

杉村廣太郎

とかくして潮の岬の端へ出た。なだらかな高低のついた一面の芝生が見る目遙かに打續いて、其の間に薊あざ蒲公英が咲いてゐる。脊の低い磯いそ馴松なだらながぼろりとと處々に立つて居て、それに繫いだ牛の姿が如何にも春らしい。村の少女子が遠くの芝生で鬼事でもして居るのか、陽氣な笑ひ聲が時をり聞える。右の方には燈臺の白い壁が巍然として空中に聳え、左には無線電信局と海軍の望樓とが、さながら崖から落ちかゝるやうな處に立つてゐる。崖の下はと見ると、幾千年の波に洗はれて、山骨あらはになつた巖が幾重となく並んで、之に太平洋の大波が、どろりと寄せては返

203

ニューギニー
New Guinea



潮の岬

し、寄せては返し、てゐる。余等は今や日本の本土の最南端の一角に立つてゐるのだ。打開けた太平洋の海面、煙波縹緲として、其の果何處ともしも覚えぬ。地圖を按ずるに、此處から正南は丁度蘭領印度のニューギニーを隔て、濠太利亞の大陸に相對し、東は遙かに太平洋の千波萬波を越えて、北亞米利加は

カリフォルニア
California
ロス
Los Angeles
アンゼルス

カリフォルニア州のロス、アンゼルスまで間を遮るものもない。日本の南端の一角といふと、如何にも世の中から棄てられた處のやうに聞えるが、其の實、此の一角が即ち日本と世界との接觸する處なのだから面白い。まづ此の岬角に立つてゐる白色不動の燈臺は、世界の船舶に其の針路を示してゐる。此處の無線電信局は、日々夜々に世界と相語つてゐる。ここに海軍の望樓に至つては、夜となく、晝となく、苟も此の下に船の影さへ見えたなら、内外何れの國の船たるを問はず、必ず其の名を問ひ、其の行先を尋ね、さては其の用向を聞いて、傳ふべき處に傳へる。かく世界的に出來た處に育つた

四月二十二日
明治四十二年

ケント

Kent
イングラ
ンド東南
端の一州

潮の岬の人々とて、其の中から濠洲や米國に出稼する者の多く出て来るのは無理もない。荒海を見慣れた眼には、對岸を隣國と心得てゐるかも知れぬ。潮の岬の民は小さいながらも世界の民だと思つて、ふと自分の事に氣がつくと、今日は四月の二十二日、去年の今日は朝日世界一周會で愈、紐育の見物を終へて、明日大西洋に乗りださうとした日、一昨年の今日は丁度今頃巴里から倫敦へ向ふ途中、海峽を過ぎて、ケント州の櫻桃杏梨今を盛と咲亂れた中を走つてゐた頃である。愈、これは世界的になつて來た。折しも望樓で頻に信號旗が揚る。それとばかり、友を促して急いで見に行けば、望樓長は芝生に立てた望遠鏡の下に

號旗を上げよ下げよと忙しげに指揮してゐる。隣の無線電信局では、ぱちぱちとけたましい音を立て、電信をかけてゐる。今まで靜まり返つてゐた此の日の本の最南端の一角は、俄かに色めき立つて見えた。沖には通報艦の淀が行く。(へちまのかは)

四 若き希望

その一

明けゆく空よ、いざ、いざ、いざ。
胸は躍る、雲の光。
あれこそ 我等の 若き希望よ。

いざ。
 眞理をたづねて 凱歌の旅路に、
 いざ、いざ、いざ、いざ。
 今ぞ、我等 わかし。

その二

拓きゆく地、いざ、いざ、いざ。
 腕はふるふ、涌くや泉。
 それこそ 我等の 若き力よ。
 いざ。
 眞理をたづねて 凱歌の旅路に、
 いざ、いざ、いざ、いざ。

今ぞ、我等 わかし。

その三

流れゆく 時劫、いざ、いざ、いざ。
 肩はあがる、國の歴史。
 これこそ 我等の 若き生命よ。
 いざ。

眞理をたづねて 凱歌の旅路に、
 いざ、いざ、いざ、いざ。
 今ぞ、我等 わかし、
 (東京日日新聞)

加藤武雄
 文學者
 明治二十一年神
 奈川縣生

五 鋏と小判

加藤武雄

2104

二人の子供が居りました。その二人の子供の前に神様が
 出て来て、一人の子供には小判をくれました、一人の子供に
 は鍬を與へました。鍬を貰つた子供は、小判を貰つた子供
 を羨んで、神様の片手落を怨みました。すると神様がいは
 れました——私はこんな風のお伽噺を書かうとした事がある——いや、お前は鍬の價值を知らねばならぬ、鍬は
 小判のやうにすぐお前の役には立たないが、力を揮つてそ
 の鍬を土に打込め、そして大地を耕せ。お前は多くのもの
 をそこに穫るであらう。さう神様が諭すのだ。——まあ
 そんな風なお伽噺なのだ。

此の二人の子供のうちで、私などは明かに鍬を貰つた方、^大鍬

黨なのだ。藝術家としても、又單に人間としても、すぐ役に
 立つ小判のやうな天分は恵まれてゐないのだ。貰つたも
 のは鍬なのだ。だから、努力して土を掘りかへさなければ、
 どうにもならないのだ。

もう十年も前に、或文學雜誌で、文壇の諸家に、藝術製作に必
 要な條件といふ問を發した事がある。その答にはいろい
 ろあつたが、中で、たしか木下杢太郎氏であつたと記憶する、
贅澤怠惰の二つを舉げてゐた。

贅澤と怠惰を縁として生れる藝術。そのころ猛烈な唯美
 主義者だつた杢太郎氏の藝術觀から云へば、藝術とはなる
 ほどさういふものかも知れない。本當の傑作といふもの

木下杢太郎
 本名は太田正雄
 醫學者
 文學者
 醫學博士
 明治十八年静岡
 縣伊東町生

岡田三郎助
洋畫家
東京美術學校教
授
明治二年佐賀縣
生

は苦心から生れるものではない、ごつ／＼とした努力から生み出されるものではない、すらりと自然に出来あがるものである——私はまたかういふ意味の事を、訪問記者をしてゐた時分に、岡田三郎助畫伯から聞いた事がある。其の時、あの顎の先にしよぼ／＼と鬚を生やした、前齒の抜けた、血色のよくない、しかし、いかにも藝術家らしい高貴を感じのする、温乎として玉の如しとでもいふやうな畫伯の風手に見入りながら、私は、なるほどさういふものかも知れないと思つた。而して、一箇の藝術苦學生たる自分自身を顧みて、聊か心の寒きを覺えたことがあつた。外の事は兎に角、藝術だけは、畢竟天分の問題だ。天分が惠

まれてゐない以上、逆立をしたつて、とんぼがへりをして見たつて、どうにもなるものではない。私はさう思ふと、いつもひどく憂鬱になつた。だが、私は近頃では、負惜みかも知れないが、おれにだつて天分はあるんだ、唯、その天分が小判でないだけだといふ一つの信念に到達するやうになつた。生れながらに備つた、すぐに使へる何ものかは自分にはない。神様から小判は貰つて來てはゐない。けれども、鍬は貰つて來てゐる筈だ。一生懸命に汗みづくで此の鍬を打込んだら、何か收穫があるに違ひない——さう、今の私は考へるのだ。そして——すこし蟲のいゝ考かも知れないが、たとへばゾ

2105

ゾラ
Zola (1840-1902)
小説家

トルストイ
Tolstoy (1828-1910)
ロシアの小説家思想家

ユーゴー
Hugo (1820-1885)
フランスの詩人小説家

ラのやうな鋏黨の大家が文學史上に決して少なくてはな
いや、トルストイだつて、ユーゴーだつて、小判よりは鋏の方
だ。彼等の藝術は、決して贅澤と怠惰の中から生れたもの
ぢや無い。すらりと出來たものぢや無い。皆苦心と努力
の賜なのだ。——そんな風に考へる事によつて、私は大い
に勇氣づけられるのである。
私のこの考が、どんなに愚かなものであるにせよ、どんなに
辻褄の合はぬものであるにせよ、請ふ君よ笑ふこと勿れ。
私には、是非かう考へなければならぬ必要があるのだから
これは或人々から見れば、全く一つのお伽噺であるかも知
れないが、お、何と人間にはお伽噺が必要であることか。

(わが小畫板)

吉村冬彦
本名は寺田寅彦

物理學者
理學博士
東京帝國大學教
授
明治十一年高知
縣生

六鼠

吉村冬彦

鼠の跳梁は段々に猛烈になるばかりであつた。晝間でも
ちよろ／＼茶の間に顔を出したりした。或日の夕方二階
で仕事をして居ると、不意に階下で烈しい物音や、人々の騒
ぐ聲が聞えだした。往つて見ると、玄關の三疊の間へ鼠を
二疋追込んで、二人の下女が箒を振廻して居る處であつた。
やつと其の一疋を箒で抑へ附けたのを、私が火箸で少し引
きずり出して、首のあたりをぎゆうと麻絲で縛つた。
縛り方が強かつたので、すぐに死んで了つた。

もう一つの鼠が何處へ匿れたか、姿を消してしまつた。何も置いてない玄關の事だから、何處にも逃れるやうな穴はない。念の爲に長押の裏を蠟燭で照して火箸で突つついて歩いたが、矢張其處にも居なかつた。唯一箇處、壁の隅の方に穴らしいものが見えたが、光がよく届かないのではつきりしなかつた。それが穴だとしても、それを抜けて何處へ出られるかといふ事が明瞭でなかつた。若しや誰かの袂の中へでも這入つて居やしないかと思つて調べさせたが、勿論そんな處には居なかつた。なんだか不可思議な心持もした。小さな動物に大きな人間が翻弄されたといふ様な氣もした。此處で若し徹底した科學的方法で明白

な論理を追跡して行きさへしたら、直ちに此の何でもない謎は解けたであつたらうが、少しは馬鹿々々しくもなつて來たので、此の目前の明かに物理の法則と矛盾したやうな事實を、假定的な長押の裏の穴で説明してしまつた。尤も科學の方面でさへこれに似たやうな例がないとは云はれない。明るみの矛盾を暗い穴へ押込んで安心して居る事がないでもない。若しこれが出來なくなつたら、多くの學者は枕を高くして眠られさうもない。

此の騒ぎが静まつてやつと十分か二十分たつたと思ふ頃に、今度は臺所で第二の騒ぎが始つた。人間の悲鳴だか動物の吠えるのだから分らないやうな氣味の悪い叫聲が、子供

等の騒ぐ聲に交つて聞えて來た。何事かと思つて見ると、年の若い女中が茶の間の眞中に立つて、大きな口をあけて奇妙な聲を出しながら、からだをいろ／＼によぢつて居る。それを四方から遠巻きに取圍んで、口々に何か言つて居るのである。

聞いて見ると、背中に鼠が這入つて居るといふのである。着物の間か、羽織の下か、どの邊かと聞いて見ても、無意味な聲を出すだけで要領を得ない。鼠が動くたびに妙な叫聲を出してはからだをゆさぶるばかりである。そつと羽織の裾を持つて靜かにかゝげて見ると、かはいらしい子鼠が四肢を伸して、丁度貼りつけてもしたやうに羽織の裏にし

がみつゝいて居る。烈しく羽織を一あふりすると、ばたりと疊に落ちた。逃出さうとするのを手早く座蒲團で伏せてそれから後は第一の鼠と同じ方法で始末をつけた。後で聞いて見ると、玄關の騒ぎが終つた後に、女中が部屋へ歸つて坐つて居ると、妙に脊筋の處がぼか／＼暖かになつて來たさうである。變だと思つて居る内に、其處に重みのある或ものが動くのを感じたので、はじめて氣がついて、いきなり茶の間へ飛込んで、奇妙な聲を出し始めたのださうである。

窮鳥は懷に入る事があり、窮鼠は猫を噛む事があるかも知れないが、追はれた鼠が追ふ人の羽織の裏にへばりつくつと

いふ事は、あまりこれまで聞いた事がなかつた。併し後になつて考へて見ると、締切つた三疊の空間から鼠が一疋消え去る道理はなかつた。假定的な長押の穴はそれつきり確めても見ないが、恐らく本當の穴でなかつたらしい。假令穴であつても、其の背面にまで通つて居ない事は、少し考へれば家の構造の上からすぐ分る譯になつて居た。それで誰かの着物に隠れて居るといふ事は初から自明的に分り切つた事であつたのである。

それにしても、羽織の裏にしがみついて、人間と背中合せにぶら下つた儘で、十分以上も動かないで居た鼠の心持が分らない事の一つである。極度の恐怖が一部の神経を痲痺

させて、假死の状態になつて居たのか、それとも本能的の智慧でさうして居たのか。恐らく後者と前者が一つ事柄を意味するのではあるまいか。

このやうな騒ぎがあつた後にも、鼠族の悪戯は止まなかつた。恐しい程大きな茶色をした親鼠は、恰も智慧の足りない人間を愚弄するかのやうに、自由な横暴な舉動を擅にして居た。(冬彦集)

七 水 車

尾 上 柴 舟

のぼらば瀧につゞくらん、
 岩きりとほしゆく水の

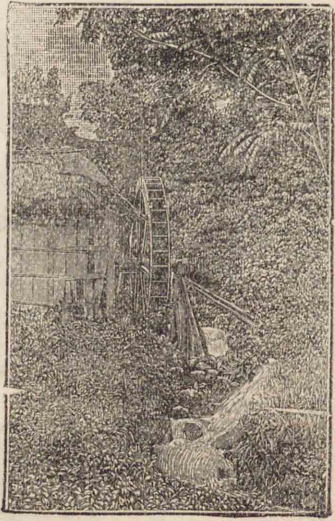
尾上柴舟
 名は八郎
 國文學者
 歌人
 文學博士
 東京女子高等師範學校教授
 明治九年岡山縣津山町生

流れの岸に小屋見えて、
あやふくかゝる水車。

たゞかりそめの板葺に
のせたる石も苔むしぬ。
さゝぬ窓より見入るれば、
守りたる人はまだ若し。

山の嵐やたちぬらん、
人に知られぬ谷の花
青きながれをいろくゞに

染めてもこゝによりて來ぬ。



つと汲まれたる山櫻、
たゞ白妙にひとめぐり
めぐると見れば、うちつゞき
のぼる椿のくれなゐや。

み山の春を手ずさみの
やうに汲みては汲みこぼし、
永き日ねもすあかぬまに
車も老いんはた人も。

206

廣瀬武夫

海軍中佐

大分縣竹田町生

明治三十七年三

月二十七日戰歿

年三十七

山縣先師

山縣小太郎

豊後岡藩の志士

明治二十八年歿

年五十九

八 訣 別

廣瀬武夫

第一次旅順口閉塞の拳に對し先考と山縣先師とに代り武勇絶倫の賞詞を賜ふこの賞賜を他の千人萬人比口より出づるあらゆる稱賛の辭にまして弟此最も榮とする所なり而して友情切々上士の功小誇らざるを訓へ更に有終の美を濟さんことを望ませらる感激の至に勝へず

今や第二次閉塞隊として福井丸に上らん

とす賜ふ所の手書を先考の真影と共に收めて懐に在り弟は天佑を確信し再びその成功を期えると共に武士として決して家名を汚すことなきを自信す

七生報國 一死心堅

再期成功 含笑上船

愈々法武運の長久ならんことを祈る

再拜

明治三十七年三月十九日

頑弟武夫

兄
海軍少將廣瀬勝
比古

兄上様

第一次閉塞に際し八代兄その寫真を贈
つて形影相伴ふの意を寓せらる今回も
同じく收めてホケツトにあり

勤王大義太分明 報國丹心期七生
傳家一脈遺風在 盟拳名聲弟與兄
寄家兄言志

幾回いふも志は同じ弟も七生人間滅國賊
の楠氏兄弟の精神を以て我が精神と心得
居傲

(廣瀬中佐詳傳)

王事ニ勤勞スルトイフ大義ヲ入ル
ズトモ分テオモス 報國ニ報酬シヨ
クト思フ誠心ハ七 夕ヒ人皆ニモ
カウテモ果サヤト思フテ居ラス
我が有瀬家ニ 祖兄傳来ノ志
遠凡即ち氣 留マ重ムルトイ
フ、カケテつて事ヲサス
隨テ和共ニモオモフ遠凡カ侍
ウコトヲス
オ互ニ抄書つて若輩ヲ天下
ニテゲヨクテハ ヤリユセシカ
兄上様

閉塞隊
明治三十七年五
月一日決行され
た第三回旅順口
閉塞隊
午前二時
明治三十七年五
月三日

九 閉塞隊

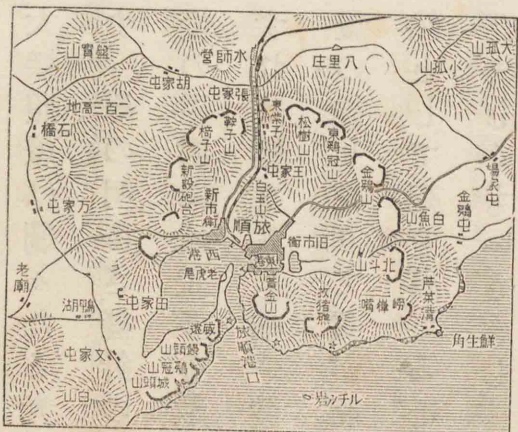
我が閉塞船收容艇隊が狂風と争ひ、激浪と戦ひつゝ、旅順口
外を漂遊せる間に、時は移つて午前二時となりたるに、閉塞
船は未だ其の姿を現さず。中止となりしにやなど思ひ居
るうち、忽ち黄金山砲臺より發砲せり。かくて血よりも赤
き一發の火光鋭く暗中に閃くと同時に、轟然たる砲聲山海
にどよめき、附近の海岸砲臺亦之に和して、五發、六發、七發續
けざまに打出せり。さては愈、豫定の行動ぞと、急ぎ受持區
域に就く。眸を凝らして港口を眺むれど、それぞと思ふ船
も見えず、彈丸の行方はた知るに由なし。射撃の目標はそ

も何物ぞ。やがて砲撃は益、急に砲聲は愈、烈し。暗黒の海岸は眞紅の砲火に飾られ、探照燈の旋轉は一層の急を加ふ。艇の動搖をも、手足の痛みをも今は全く打忘れ、暫し茫然として此の壯烈なる光景に見惚るゝ折柄、忽ち見る、港口間近く二三の水雷艇らしきものゝ電光を潜りて縦横に馳突するを。中にも一隻の水雷艇は敵弾に傷つきしにや、熾に蒸氣を噴出しつゝ、敵の探照下に猛撃せられつゝあり。是、閉塞隊前衛の任務を有せる第十四艇隊が港口偵察を行へるなりけり。

かくて砲撃約十分ばかりにして、水雷艇は何れも探照界を退けるものゝ如く、其の姿を闇に没すると共に、敵の砲火も亦歇みぬ。やがて閉塞隊は來らんと、我等の艇隊は圓陣を畫きつゝ、哨區の警戒を續けたり。仰ぎ見れば六萬燭光の大探照燈は爛々たる光輝を海面に放ち、時々我等を照し出す。その明るさ、縫針の穴さへ明かに見ゆるばかり。探照燈の周圍には幾多の敵砲臺あり、發砲の電流一たび之に通ずれば、艇も人も唯一發の彈丸に粉碎せらるゝなり。探照燈の旋り來りて我が艇を照す毎に、今や打つ、今や中ると、默然として死を待てる心の中や如何ならん、思ひやるだにいたましくもいさまし。

風は少しも其の力を緩めず、敵の警戒は益、嚴を加へつ。中央二基の探海燈は港口を挟みて十字照線を作り、左右の二

基は旋動して頻に餌を探れり。時進みて午前二時三十分
となるや、一隻の閉塞船忽焉として敵の探照界に現れつ。



匪蹉大尉
海軍大尉匪蹉胤
次

撃を開始せり。殷々たる砲聲は百雷の一下するが如く、狂
風も怒濤も爲に其の聲を奪はれ、眞紅の砲火は點々として

旅 旅 順 順 口 附 近

是ぞ匪蹉大尉の指揮せる三河
丸なりける。城頭山砲臺先づ
砲火を開きて之を邀へ、饅頭山
蠻子營威遠黄金山夾板嘴、嶗律
嘴等の永久砲臺を始として、港
口兩岸に布列せる大小幾多の
臨時砲臺これに和し、一齊に砲

高く低く暗中に閃き、紫電紅焰交、相映射す。その凄慘の状、
口舌のよく盡すところにあらず。

さて三河丸は如何にと顧みれば、其の瘦せたる煙突より、ど
す黒き煤煙を強風に靡かせつ、降來る飛彈を物ともせず、
港口指して一直線に突進しつゝあり。城頭山探照燈は船
の眞横を照して寸時も失はず、墨繪の如き船影は青白き電
光の裡に物凄く畫き出されつ。煙突細く、檣小さく、加之速
力遅々として船首に波をもえ揚げぬ風情は、屠所の羊の一
入哀れなり。船の周圍には大小の彈丸落下して、水煙沸々、
銀柱林立、時に全く船影を蔽ふことあり。其の砲撃の激烈
なる、最早船内には一人の生者もあるまじとまで思はれた

り。されど船は尙依然として前進を続け、遂に港口附近に達しぬ。

此の時又數隻の閉塞船は一團となりて、敵の探照界に現れたり。敵砲火の大部分は今や此の新なる餌食に向ひぬ。先に港口に進みたる三河丸は今や正に爆沈を果したるもの、如く、合圖の火箭を高く中空に放てり。踵いで二三の閉塞船は斷續して更に又港外に現れたり。敵の射撃は益急を加ふ。大は二十八珊の榴彈砲より小は二听三听の輕砲に至るまで、幾百門の砲口より打出す大小の砲彈は雨より繁く、船側に碎けては紅焰迸發、暗中に閃き、海面を打ちては水柱三丈、電光に輝く。砲彈は轟々として大海にどよめ

イルミネーション
點燈裝飾
Illumination

き、砲火は閃々として暗空に瞬き、盛春の紅花咲きては散り、散りては咲くに異ならず。正に是、滿山のイルミネーションなり。

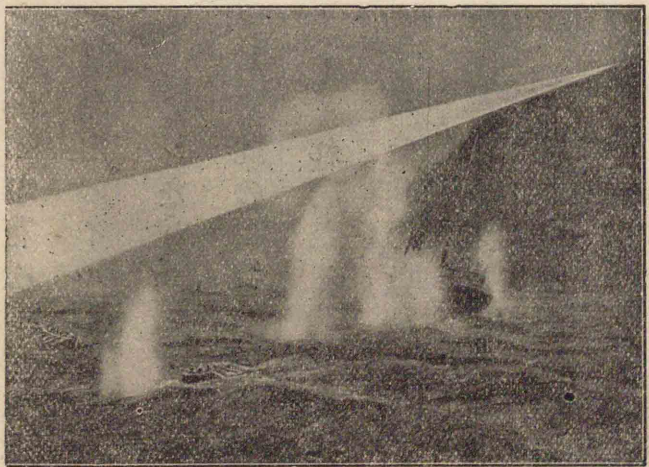


13121110987654321
愛江遠三小佐相千彌福米仁報
國戶江河樽倉模代彦井山川國
丸丸丸丸丸丸丸丸丸丸丸丸

探照燈は交々之を照して、海面の明かなること白晝を欺き、各船の狀況は歴々として指點すべし。檣の折れたるもの、煙

閉塞隊

突の碎けたるもの、白煙を噴出せるもの、船體の既に半ば沈没せるものなど、苦戰の程思ひやらる。折しも四番目に進みたる一船は忽ち猛烈なる水煙に包まれ、見る間に其の姿を水面より没したり。是、犬塚大尉の指揮せる愛國丸が敵の水雷に罹れるなり。かくて残れる五隻の閉塞船は猛烈なる敵彈を冒しつゝ、悉く港口に達し、相前後して爆沈の火箭を揚げたり。時

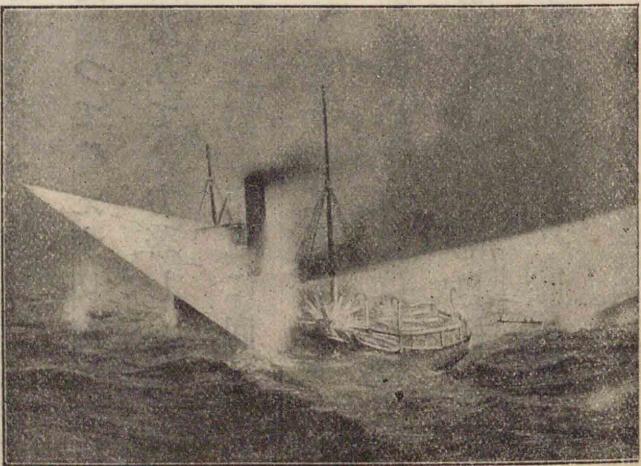


閉塞の図

犬塚大尉
海軍大尉犬塚太郎

正に午前三時半なりき。

時に鮮生角方面に方り、一隻の閉塞船突如として嶗嶺嘴の探照界に現れ、群を離れし濱千鳥の友を追ふが如く、捷路を執りて港口に向ひ驀進したり。これぞ向大尉の指揮せる朝顔丸なりける。纔かに緩まんとせし敵の砲撃は茲に再び激烈となり、其の全砲火は殆ど此の一船に集中せり。朝顔丸は我が艇隊と敵壘との中間を眞一文字に突



の突撃

向大尉
海軍大尉向菊太郎

進したれば、我が隊との距離は僅々一海里に過ぎず、従つて船體に命中する敵彈は手に取る如く見ゆ。忽ちの間に船側に爆裂したるもの無慮十餘發を算ふ。殘酷無情、殆ど見るに忍びず。全身の血は煮え返つて、覺えず切齒扼腕せりと見れば、船の後部は已に半ば沈みて、速力著しく減じたり。而も煙突よりは盛に黒煙を吐きて、尙も死地向ひて急ぎつゝあり。嗚呼乗員は人か、はた神か、眞に是、日本魂の精なりけり。敵は少しも砲撃の手を緩めず、流彈は頻に我等の附近に飛び來れり。かくて朝顔丸は遂に港口に達するを得ずして、黄金山の南方斷崖下に沈没しぬ。時は凡そ午前四時なりき。

本田少佐
海軍少佐 本田親民
高柳大尉
海軍大尉 高柳直夫
白石大尉
海軍大尉 白石霞江
湯淺大尉
海軍大尉 湯淺竹次郎

後にて聞けば、此の夜しも突入を決行したる閉塞船は、前記三河丸、愛國丸の外、本田少佐の指揮せる遠江丸、高柳大尉の小樽丸、白石大尉の佐倉丸及び湯淺大尉の相模丸など都合八隻にして、乗員合計百五十八名、その中我が收容隊に救はれしものは僅かに六十七名に過ぎず。殘れる九十一名は彈丸に碎かれ、怒濤に吞まれて全く行方不明となりたり。殊に哀れなるは朝顔丸、小樽丸、佐倉丸、相模丸の四隻にして、乗員中一人の生還者だになかりきとぞ。

狂瀾怒濤を冒して決行せる第三回旅順口閉塞は、其の行動斯の如く壯烈に、其の結果斯の如く悲慘なるものなりき。帝國海軍は之を以て天下後世に對する誇となすべく、帝國

國民は忠勇義烈なる此の犠牲者に對して深き敬意と感謝とを表すべきなり。(戦影に據る)

一〇 札幌農園

菊池幽芳

菊池幽芳
名は清
新聞記者
明治元年水戸市
生

札幌に於て最も詩趣に富める地を求むれば、蓋し札幌農園か。札幌農園は農科大學に附屬せるものにして、實に我が邦の模範農園たり。農園としての設備完全なるに近きのみならず、地は即ち石狩平野の一部なるが故に、到底内地に於て求むべくもあらぬ廣大なる地域を領し、凡百の施設整頓して、些の遺憾を感ずるなく、經營の手腕は縦横に發揮せられて餘蘊なきに近し。然れども余はこゝに農園の設備

を説かんとするものにあらず。余の記さんとする所は唯その風致にあり、農園の粹たる廣き牧場の風致にあり。西北の二面全く開け、平野遠く連なりて、西は遙かに札幌の障屏をなせる連山の紫翠に接し、北は石狩原野を指してその際涯を知らず。萋々たる牧草、氈の如き處、こゝには彼の中の雜樹の互に相凌ぎ相排するが如きことなく、廣き空間を占めて處まばらに立てる楡ありて、晝は残る限なく日の光を浴び、夜は思ふがまゝに星の雫を受く。何に遮らるるものもなきその根は、太古のまゝなる土壤より潤澤なる養分を吸取りて、鬱蒼たるその枝葉は以て百歩の地を蔽ひ、亭々たるその幹は以て百尺の空を摩す。一たび足をこの

農園の牧場に入るゝもの、一人として遺憾なく發揮せられ
 たる此の楡の美に驚歎せざるはあらざるなり。
 それ廣漠たる平野の緑は既に人の心を壯快ならしむ。こ
 れに喬木の亭々たるを配する時、誰か一段の風致を添へ來
 るを覚えざらん。唯その喬木の種類によつては、またその
 風致に多少の増減なき能はず。思ふにかゝる平野を飾る
 に適せる樹木は松にあらず、杉にあらず、實に其の高さと共
 に深さを有し、深さと共にまたその幅を有するもの、分明に
 言へばその枝葉十重二十重に密生し、鬱然として晝猶暗き
 樹陰を作る喬木ならざるべからず。請ふ、かくの如き喬木
 の森々として青緑の平野に立てる様を想像せよ。何ぞそ

ホル
スタイン
Holstein
短角牛
Shorthorn
エイアシャー
Ayrshire

の畫の如くにして又詩の如くなるや。人若し十分にかゝ
 る想像を回らすことを得たりとせば、其の人は即ち遺憾な
 く札幌農園を其の腦裡に描き得たるなり。
 農園が楡によつてその風趣を加ふること斯の如し。然れ
 どもこれをほ靜態に於ける風趣のみ。更に此の間に牛を
 點じ、馬を點じ、羊を點ずるに至つて、農園の眞風趣は始めて
 動態となりて活躍す。
 丈高く、四肢長く、體軀驚くべきほど巨大にして、黑白の斑を
 有せるホルスタイン種の牛が、その大樹の下に、一は横たは
 り、一は立てる、或は長方形の體軀をなせる赤色の短角牛、眼
 柔しく四肢短きエイアシャー種の牛等が、此處に彼處に草

Merino
メリノ

を食へる、或はさまよへる、或は尾をふれる、更にうるはしき毛を被れるメリノ種の羊が、その角の大にして曲れるには似ず、いと優しき眼光もて馴々しく近づき來るを見ずや。若し此の世に樂園といふものありとせば、その關門は實に斯の如き處なるべし。その繪畫的なる、その詩的なる、又附近の建物と相待



札幌農園牧場

つてその米國的なる、少なくともこゝに來るものは、内地の光景と甚だしく相隔れるを感ずるならん。札幌農園は實に斯の如き特色を有す。余は斯の如き農園を自然の師として學べる學生の幸福を賀し、又此の學校より往々文章の士を出せることの、決して偶然にあらざるを知れり。(日本海周遊記)

一 豆

嘗て豆の芽生えの發育する状態を活動寫眞のフィルムに收めたものを見たことがあります。それは幾十倍かに擴大されて映るので、能くその生活振りを觀察することが出

Film
フィルム

來ました。まづ一粒の種子が柔かな黒土に託されると、暖かな春の光が雨の如く降りそゞいでそれを温める。濕りけは豆の細胞の膨脹と分裂を促し、土はあらゆる養分を提供して成長の一刻も早からんことを待ち望んでゐる。豆の小さな胚は、周囲の温かい同情と内部生命の衝動とに堪へかねて、むくくとかはいゝ頭をもたげ始めます。思ふに細胞の分裂は、豆としてのあらゆる機關を形作つて、分業の端緒をなすものです。しかもその機關が、豆の生命をはぐくむために一本の莖の上下左右に並列して、おのおのその職につき、互に一致協力して有機的活動をなす有様は、進歩せる社會組織の範を示すものと見られませう。そ

して力の實現上最も經濟的な分業と愛の具體化ともいふべき一致協力とが、一粒の豆の生活にも行はれてゐるのを見て、私は思はず感歎の聲を放ちました。やがて豆の幼芽は、細い根を出し、小さい葉をひろげて、明るい天地の間にそれ相當の空間を占め得たる喜を感じずるものゝ如く、益力をこめて伸びようとします。大地の慈悲を結晶させたやうな雨露の雫が、この若い芽生えに滲込んでこれを慰めます。凡そ生物の生命は、動植物たると人間たるとを問はず、すべて愛に芽生え、同情に伸びます。今や豆の莖も根も葉も雨露の同情に渾身の勇を鼓し、ぶるくくと身ぶるひして、僅かに伸びあがると一休みし、再びぶるく

と身ぶるひして、伸びあがるとまた休みます。この時、豆の芽生えを組織する原子は必ず感激の歌をうたひ、原子の團體たる細胞は成長の曲をかなで、芽生えそのものは勝利の喜に身を振はせては伸びあがるのでありませう。豆は伸びに伸び、繁りに繁つて蔓を出し、棚をつかんで更に伸びあがります。向上はあらゆる生物に共通した本能でありませう。やがて生の歡喜は紫の花に顯れて一段の趣を添へます。そして雄蕊雌蕊の生殖機關をやらかに包める花瓣の美しさよ。雄蕊の花粉が自己を育てた花の雌蕊に着かず、ひたすら昆蟲の媒介を待つて他の雌蕊をしたひゆく自然の妙趣よ。曾て聞く、高山植物の花を顯微鏡下

に見れば、ことごとく顔料の結晶より成ると。よし高山植物ならずとも、恐らくは何れの花の色も皆顔料の結晶でありませう。紫の花弁も、黄いろい花粉も、緑の葉綠素も、自然の手によつて彩られた生々した顔料であることだけは疑ありませんまい。フィルムの花には香氣をとまはないが、實物からは言ふに言はれぬ芳しい香を放つてゐるのでせう。その證據には、何處ともなくこれに誘はれて訪ひくる蜜蜂が、嘴にも脚の毛にも黄いろい花粉をつけながら、我を忘れて花に取りついて甘い汁を吸つてゐます。花時を過ぎた豆の莢からは、生存に努力した報として、數十

ベスト
Best
最善

倍數百倍の豆粒がこぼれます。一部分は次代の同族に、生命を傳へる種子に使はれませうが、其の大部分は直接人間の体内に運ばれて、人間の生命を發育させる助となります。豆炒り湯豆腐味噌汁納豆あんこなどの形で人間の生命を養ふ食物となります。嘗ては豆としてのベストを盡して花を咲かせ實を結んだ小さい生命の流れが、更に人間の生命と合流して複雑な精神作用を起します。豆の生命と人間の生命との間にかくも密接な關係がある以上は、私達はわが身の如く手厚くこれを愛養すべきものでありませう。

(東京日日新聞に據る)

千家元麿

詩人
明治二十一年東
京生

一一一 雨

千家元麿

雨がふつた。

清らかな水が草木をぬらし、

玉をつゞり、綺麗な水たまりが庭に出來た。

空には雲が裂けて

澄んだ青空がのぞき、

息ぐるしい暑さがすつかり去つた。

冷えとくとする位明るく、

そこらが澄切つてゐる。

本當に清らかな雨

その美しい世界を

私は蛙のやうに眼をばちくりさせて
見てゐる。

清くて、明るくて、

たのしい極樂だ。

木々から銀の玉が澤山滴る。

夕立あとの静けさ、明るさ、

輝いた、品のある滴が垂れる。

草の間の小さい池へ、

自然に出来た池へ、

明るい不思議な

神祕な驚異を見せてゐる。(炎天)

一三 貢進生

明治になつてから、新設の事業が多かつたが、貢進生の制度もその一で、よく時勢に適したものであつた。當時幕府は亡びたが、藩はなほ存して、思ひくの教育を施して居た、統一がなかつた。大學南校は統一を圖つた。全國の秀才を集めて、歐米新進の學問を修めさせた。貢進生は藩を代表するものであるから、自然に競争心を起して勉強せざるを得なかつた。その貢進生を選出させるのに、十萬石以上の大藩は三人、十萬石以下五萬石以上の中藩は二人、五萬石の小藩は一人、十五六歳以上、二十一二歳以下で、學力品行共に

優秀なものと定めた。藩毎に秀才を選んだ。中には情實で選ばれたものもあり、門地で選ばれたものもあるが貢進生は概して各藩中第一の秀才であつた。貢進生に選ばれることは、當時の青年に取つては此の上もない榮譽であつたに相違ない。

三百の貢進生が大學南校に集つた。幕府は倒れても封建はそのまゝの時代の事として、尊藩におかれては「弊藩に於ては」貴殿は「拙者は」と、しかつめらしく挨拶しあつた。南は薩摩、北は奥羽、日本の國といふ國から、國訛をその儘もつた青年が出た。散髪もあれば結髪もあり、洋服もあれば脊裂羽織もあり、丸腰もあれば刀を腰にしたのもあり、貴公子

もあれば山猿もあつて、大學南校は小日本の觀を呈した。英漢數の三者に通じたものもあつたが、漢數に通じて英に通じないものが多く、漢にのみ通じて英數に通じないものもあり、英にのみ通じて漢數に通じないものもあり、その通ずるにも深淺があつて、學力がまち／＼であつたから、同じ貢進生を十四組に分け、進歩の早いものは、どし／＼上の組へ進ませるやうにした。名は大學でも、教へることは中學程度であつた。非常の秀才もあれば、中には到底大學教育を受ける資格のないものも交つて居た。貢進生三百人の外に、舊來の學生が三百人もあつて、都合六百人。明治五年、第一番中學と名が變ると共に、その六百人の中から三百人

一三 貢進生

明治維新後、新設の藩校に選ばれるもの

選、バレン官立学校に入学したもの

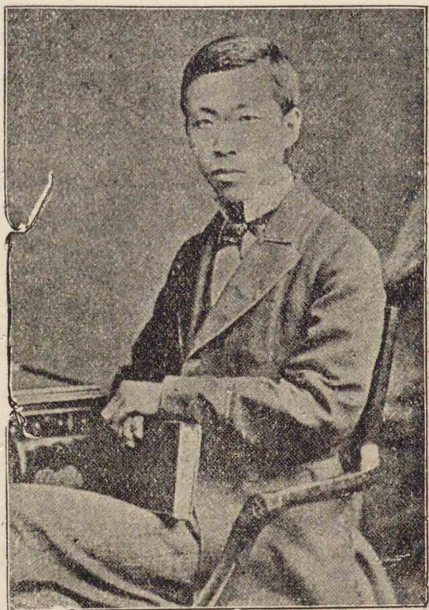
開成學校
明治六年大學南
校の名から改め
た

杉浦重剛
教育家
近江膳所藩士
宮内省御用掛
日本中學校校長
稱好塾主
大正十三年卒
年七十一
楠陰
重剛の兄

を选拔し、他の三百人を放逐して、だいぶ粒が揃つた。開成
學校となるに及んでは、法學部、理化學部、諸藝學部、鑛山學部
に分れ、法學部と理化學部は英語に限り、諸藝學部は佛語に
限り、鑛山學部は獨逸語に限るやうにして、稍、大學の形を成
した。東京大學となつてからは、附屬醫學部の外、法、理、文の
三學部が置かれた。文科が茲に始めて置かれたのである。
からえみし業はかはれど、大丈夫の
こゝろ一すぢ大君のため。
杉浦重剛先生は兄の楠陰先生からこの送別の歌を受けて、
明治三年に膳所藩の貢進生として遊學の途に上られた。
一人の僕が隨行した。先生は十六歳、僕は十八歳であつた。

琵琶湖の漣はほゝゑんで先生を送つた。品川灣の波は躍
つて先生を迎へた。

先生は漢學に達して居られた。又數學にも達して居られ



英國留學時代之杉浦重剛

た。蘭學なら多少の
素養があるが、英語の
素養が無かつたから、
最下の十四の組に入
れられた。然るに學
力に應じて級を進め
られたので、十八歳の夏には三の組に進まれた。間もなく
二の組に入り、十九歳にははや最上の一の組に入られた。

實に非凡な進歩であつた。それには先生の天資もあるが、勉強が一通りではなかつた。

貢進生は寄宿舎へ入れられた。三百人の中に、珍しくも唯一人の曾識の人があつた。それは遵義堂の同役の澤村録之助氏であつた。姓名が宇都宮太郎と改つて、本庄藩の貢進生になつてゐた。「おや、君か。」と互に喜び合つた。宇都宮氏は英語が能く出来たから、一の組に居た。先生は宇都宮氏に向つて、「一の組では誰が能く出来るか。」と問はれると、「小村壽太郎と長谷川芳之助の二人だ。」と答へた。その眼識は誤つて居なかつた。貢進生の制度を案出した小倉處平氏は、飢肥藩から小村氏を推薦した。大阪洋學校で、長谷川氏

遵義堂
膳所藩の學校
小村壽太郎
外交家
日向飢肥藩士
外務大臣侯爵
北清日露の役に
大功があつた
明治四十四年薨
年五十七
長谷川芳之助
鐵業家
政治家
肥前唐津藩士
工學博士
大正元年歿
年五十八
小倉處平
英學者
武人
日向飢肥藩士
明治十年西郷に
與して死んだ

に教へた事がある。で、小倉氏は二人に重きを置いた。貢進生入學の當時、小村氏に向つて、「長谷川といふ秀才が来るから、負けてはならぬぞ。」と勵ました。又長谷川氏に向つて「小村といふ秀才が居るから、負けぬやうに勉強しろ。」と勵ました。宇都宮氏の見るところも小倉氏の見るところも同じであつた。それが卒業してまでも事實に現れた。入學當時にはこの二人と先生とは甚だしい距離があつた。然るに僅か三年の間に、先生はその先輩の秀才に追付いたのである。入學の當時は、始めて英語を學ぶものが多かつた。漢學が既に上達して、文章軌範や八家文をすらく講義することの出来るものが、猿とさうして犬では、馬鹿々々しい上にも、

文章軌範
七卷
宋の謝枋得撰
重に唐宋の古文
を集めたもの
八家文
三十卷
清の沈德潛撰
唐宋の文章家八
人の文を集めた
もの

覺えるに困難であつたから、匙を投げて歸國したのも多かつた。先生はあらゆる困難に打克つて進まれた。教場から歸つて来て、自分の室に入るや否や、すぐ傍目もふらずに、一生懸命に勉強して、唯々一刻も早く他人の上に頭角を見はさうと力められた。多い學生の中には、随分物食ひにゆくものもあり、不潔な場所に入出入するものもあり、散歩運動にかこつけて、あちこちと遊んで歩くものもあつて、先生もその仲間に入らないかと誘はれたこともあるが、一切はねつけて、唯學問にのみ熱中し、夜などは遅くまで燈に對して、雞鳴を聞いてそのまゝ起きて了ふことなども度々あつた。その當時先生と室を同じうしたものが、後になつて、君

東風與一
番新。我獨孤清
猶守。我。頼有
三床頭四君子。悠
然迎得古稀春。
甲子新年口占
天台道士

には本當に困つた。寢ろといつても寢ず、遊びに往かうといつても往かず、始末が附かなかつた。などと昔話をしたことがあつた。先生は糞勉強家とか、紙魚とか、いろ／＼の綽名を付けられて、遊戯の相談の時には「彼奴は駄目だ」と除物にされて居た。先生は一向頓着せず、却てそれを有難く思

東風與一
番新我獨孤清猶守
頼有床頭四君子悠然迎得古稀春

甲子新年口占

天台道士

跡筆剛重浦杉

つて、一心不亂に勉強された。當時辭書は不完全で、講義録などといふものはなく、参考にしようといふ外國の書物は

宮崎道正
理學者

磯野徳三郎
化學者
高等師範學校教
授

榊原專藏
名は豊
膳所藩士
明治三十三年卒
年六十四
本多家
膳所藩主

來て居なかつたから、先生の苦心は一方でなかつた。先生の學資はといふと、開成學校有名三幅對に、先生は宮崎道正、磯野徳三郎二氏と共に、無産三幅對に入れられたほどの貧書生であつた。學校から僅かの小遣を支給される外國元から仕送を受けるなどの便宜は更に無かつた。明治四年、廢藩置縣と共に貢進生の制度も止んで、先生の學資は全く絶えた。先生は後に大津縣參事になつた榊原專藏氏に頼んで縣費生になられたが、五年九月に至つてそれも止つたので、本多家の家扶の某氏から金を借りて學問を續けられた。幸にも學校で給費生を設けたので、先生は貧窮の旨を述べて給費生となられた。

岡村輝彦
法學者
辯護士
無錫藩士
安政二年(二五二五)
生
西松二郎
鎮物學者
高等師範學校教
授
長崎の人
明治四十二年卒
年五十五
増島六一郎
法學者
法學博士
辯護士
彦根藩士
安政四年(二五二七)
生

貧窮生は先生の外にも多かつた。發達盛りの青年時代には、誰も三度の食事だけでは満足出来るものではないが、間食しようにも、するだけの餘裕が無かつた。先生が第一番中學に在學の頃は、學校の近くに住んで居られた兄の楠陰先生が、毎夜飯と澤庵を陶器の辨當入に容れて先生に贈つてくれた。その辨當が來ると、岡村輝彦氏だの、宮崎道正氏だの、西松二郎氏だの、増島六一郎氏だのといふ連中は、餓鬼道の亡者のやうに寄つて來て、箸の廻るのをもどかしがつて、いきなり手摺にして、「旨い〜。」と喜んだ。一夜、先生は宮崎、岡村諸氏と集つて話して居るうちに、腹が減つて堪らぬので、皆の懷中を調べたが、誰も一文もなかつ

た。そこで疊を上げたり、床の上を搜したりして、やつと三錢を得て、焼芋を買つたといふやうな話もある。着物は唯一枚、夏は單衣にし、冬は綿入にして着られた。洋服は學校から支給されることになつて居たが、金が無いので、破れても修繕することが出来ず、破れたまゝにして置かれたから、チヨッキの横が摩り切れてしまひ、上衣を着たままチヨッキを引抜くことが出来た。杉浦のチヨッキと云つて、當時學生間に有名であつた。(杉浦重剛先生)

一四 杉浦重剛君を弔す 穂積陳重

謹んで杉浦重剛君尊靈に拜告す。

穂積陳重

法學者

法學博士

前樞密院議長

伊豫宇和島藩士

大正十五年薨

年七十二

大學南校

明治二年開成所

を改めて大學南

校といつた

今の東京帝國大

學の前身

不肖陳重は君の數多き友人の中で最も古く且最も親しく交誼を辱うしたる一人として、推されて友人を代表し、茲に靈柩の前に拜伏して、幽明別離の辭を述べべき、最も悲しき役目を負ふことになりました。回顧すれば、私が始めて君と相知るに至つたのは、明治三年、朝廷が諸藩に令して貢進生を徴し、大學南校に入らしめた時でありまして、今を距ること實に五十六年の往時であります。君は膳所藩の貢進生であり、私は宇和島藩の貢進生であり、殊に年齢を同じうし、學科を同じうして居りました。貢進生の年齢は十六歳より二十歳まで、ありました。君は當時十六歳の青年で、生徒中の最年少者であつたにも拘

らず、其の人格の高邁にして、已に自ら成人の風があり、殊に漢學の素養が最も深かつた爲に、嶄然頭角を見はして、夙に儕輩の推重する所となり、慷慨氣節を尙ぶの青年は、同氣相求め、期せずして君を中心とし、校中に一團をなし、或は言論に、或は文章に、又時としては青年客氣の餘、誤つて實力に訴へ、只管士氣の振作と校風の廓清とに努めたものであります。私共舊友も、其の驥尾に附し、當時君との友交に依つて、受けた感化は、私共の生涯に極めて深い印象を遺したといふことを自覺するものであります。此の如く君は青年の學生時代に於て、既に儕輩の間に牛耳を執り、身を以て範を示し、氣を以て事を行ひ、至誠人を動かすの素質があつて、後

驥尾
顏淵雖篤學一
附驥尾而行益
顯。(史記)

牛耳
盟主の意
諸侯盟誰執牛
耳。(左傳)

に育英を以て事業とせらるゝの兆は、既に當時に現れて居つたのであります。

其の後明治九年に、私共は君と共に文部省留學生として英國に派遣せられ、留學數年間は、起居を共にしたことが多くありましたから、君の精神上知識上の感化を受けたことが殊に多くありました。君は蒲柳の質を以て過度の勉學をせられたために健康を害せられ、満期前に歸朝せられましたが、其の後君が畢生の獻身事業とせられた育英のことに對しては、前に述べた君の獨得の性格は、君をして他に比肩者なき適任者たらしめました。其の功績の顯著なるは、固より當然の事であります。しかしながら君の育英事業の

蒲柳
松柏之姿、經霜
猶茂。蒲柳之姿
望秋先零。(世
說)

今

大正十三年二月十六日葬儀の日
トラファルガル
イスパニヤの西南海岸の岬
一八〇五年十一月二十一日
ネルソンの英艦隊が佛伊聯合艦隊を破つてナポレオンの英國侵入を挫いた處
Trafalgar
ネルソンの英艦隊が佛伊聯合艦隊を破つてナポレオンの英國侵入を挫いた處

功績と皇室及び國家社會に對する勳功とについては、世人の夙に周知する所、又此の式場に於ても他の人々より述べられる所でありますから、茲には之を省きます。只私共友人はかゝる崇高なる人格者を友とし得たることを畢生の欣幸とするにつけても、之と別るゝを悲しむの情の一層切なるを感ずる次第であります。

今君に別を告ぐるに當つて想ひ起すは、曾て南校時代君と共に始めて英國史を學び、トラファルガル海戦に於けるネルソン提督戦死の條を讀んで、共に感想を語り合つたことであります。ネルソン提督が、敵艦に致命の重傷を受け、死期將に迫らんとするの刹那、敵艦隊全滅の報を聞いて、神に

ネルソン
イギリスの
水師提督
Nelson
(1758-1805)
神に謝す
Thank God, I
have done my
duty.



杉浦重剛

謝す、我は我が務をなせり。と叫び、莞爾として瞑目した條に至り、感慨無量、君と相語つて、最期の瞬間、我は我が務を爲せり。と公言して死することを得るのは、人生理想の極致である。と云ひました。

後にも此の事を想ひ出しては互に話し合つたことがありました。君が正に最期の瞬間に於て此の言を發し得た人であつたことを喜ぶものでもあります。君は事柄こそ違へ、近年或はトラファルガル海

戦の如き一大事と考へたこともあつたであらう。又君は重き病床に在つて、必ず「神に謝す、我は我が務をなせり」と云ひ、莞爾として永眠に就いたであらう。かう思つて、私共友人は聊か別離の悲哀を慰むる所ある次第であります。今私は君の友人一同に代り、君の生前に於ける多年の感化指導と終始渝らざる温かき友情とに對し、最後に厚く御禮を申上げ、君の在天の英靈が安らげく、平らげく、長へに鎮りまさんことを祈ります。(杉浦重剛先生)

永田秀次郎
政治家
貴族院議員
前東京市長
明治九年兵庫縣生

一五 東宮御成婚奉祝會

永田秀次郎

數萬の參列者肅として聲なく、森嚴の氣天地に充ちたる靜

一重橋
宮城の正門にある橋
この時の式場は一重橋前の廣場にしつらされた

珍田大夫
東宮大夫伯爵
珍田捨己
入江侍從長
東宮侍從長子爵
入江爲守

謐を破つて、日比谷公園の方面に幽かに萬歳の喊聲が傳はり、それが次第々々に馬場先門に近くなつて來た。と思ふ間もなく、軍樂隊の合奏が忽ち起つて、我が東宮殿下、妃殿下の丹塗の御車が肅々として二重橋外に近よられる。やがて私共最敬禮の間に御機嫌麗はしく御下車。東宮殿下には陸軍中佐の軍服に大勳位の勳章を佩びさせられ、妃殿下には淡紫紅色の御洋裝に拜せられた。私は御先導として稍、右寄に敷布を踏みながら御案内申上げたが、一步毎に兩殿下の玉歩の歩度を測つて、やがて皇族方の御立の前を過ぎ、御座所の入口まで御案内申上げて横に避けた。兩殿下が室内に御入りになると、珍田大夫、入江侍從長、奈良

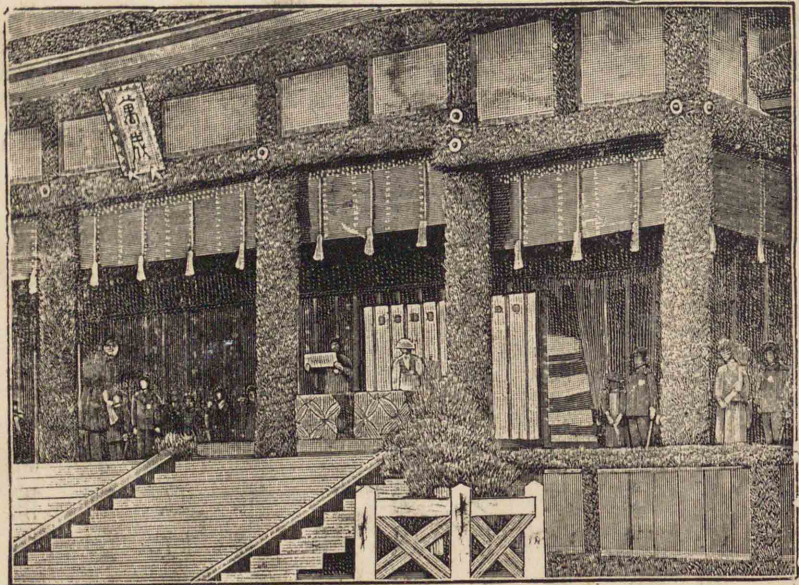
奈良武官長
東宮武官長
陸軍大將
奈良武次
島津女官長
東宮女官長
島津治子

Mat
マント
筵席

東郷元帥
元帥海軍大將
伯爵東郷平八郎
清浦總理大臣
當時の内閣總理
大臣子爵清浦奎
吾

武官長・島津女官長の方々も續いて入られた。それから直ちに各宮殿下に一々御對面遊ばされ、引續いて市長・議長・參與・助役・副議長の順で拜謁を賜はつた。拜謁が終ると共に、私と議長はすぐに御座所の玄關から横に出て式場の壇下にまはり、マントの上に、私は右に、議長は左に並んで台臨を御待ち申上げた。此の時既に壇上には兩翼の後方に東郷元帥・清浦總理大臣始め各省大臣・五大都市々長其の他きら星の如くに居流れ、壇下には三萬五千の市民代表者何れも脱帽の儘立錐の地なき迄に大廣場に充ち満ちて居る。やがて君が代の軍樂の響につれて、各宮殿下には廊下傳ひに先づ殿上に現れ給ひ、左右兩側の椅子におかけになつた。

馬渡助役
當時の東京市助
役馬渡俊雄



東京市の東宮御成婚奉祝會

君が代の吹奏が二度目より三度目に移つたころほひに、兩殿下は馬渡助役の御先導で靜々と壇上に臨ませられた。東宮殿下の凜々しき御英姿と妃殿下の貞淑なる御麗容とを並び拜したる數萬の參列者は、思はず萬歳の歡聲を揚げた。兩殿下は靜かに中

十時内記課長
十時鐘

シルクハット

Silk-hat
禮帽

央の壇上に進ませ給ひ、錦欄の光輝くテーブルの御席に、殿下は左、妃殿下は右に御着席遊ばされた。参列者は此の時一齊に最敬禮を行つた。私は十時内記課長が差出した服紗包を受取つた。そして奉書包の服紗を開き、服紗とシルクハットは之を内記課長に手渡して、式辭は右の手に持ちながら、極めて謹嚴な態度を以て稍俯伏の心持で中央正面の階段を一階毎に確と踏みしめつゝ昇つて行つた。此の階段は十階であつた。私は階段を昇りつめて更に一步前方に進んだ。此の時の私は殿下の御座所より六七尺の距離であつた。私は先づ殿下に向ひ、最敬禮を行ひ、次に同じ位置にて稍、右向をして妃殿下に向ひ、最敬禮を行ひ、次に元

の如く少し正面に向きなほつて徐ろに奉書包を開き、悉く奉祝文を開き盡したまゝ、兩手に捧げ、軽く一禮したる後、奉祝の辭を朗讀した。私はかゝる多人數の場所で氣おくれがすると云ふ心配は少しもして居なかつたが、唯殿下に咫尺し奉るあまりの光榮に感激した爲、胸が塞がつて發音が出來なくなり、はせぬかと衷心より心配した。これは何としても自己の理性に訴へて、感情を制御しなければならぬと思つた。斯様な人知れぬ心配があつたので、兎にも角にも無事に讀了つたときは、眞にほつと一安心をしたのである。

私は讀了つて、再び元の如くに奉書を疊んで右の手に持ち、

軽く會釋して一步後ろに下り、稍俯し目に控へて居た。東宮殿下には此の時入江侍従長の奉つた令旨の文書を御受取になられて、直ちに御座席に御起立遊ばされた。同時に妃殿下も御起立になり、御參列の各宮殿下も御起立遊ばされた。殿下には玉音殊に朗々として、數萬の群衆の隅々にまで聞える程の御高聲を以て、極めて堂々として、而も餘裕綽々たる御態度で、洵に御立派に令旨を賜うたのである。それは、東京市が震災後に拘らず特に奉祝の誠意を表せしを嘉せられ、且將來大いに復興の事業に努力せよとの有難き思召であつた。私は二百五十萬市民を代表して、畏くも殿下に咫尺して此の有難き思召を拜し、實に感激恐懼に堪

へなかつた。更に又殿下のかくも御立派なる御態度を眼前に拜し奉つては、實に何とも言はれぬ心丈夫な、嬉しい、勿體ない氣分が胸胸に燃える心地がして、唯譯もなく感涙が催されるのであつた。

令旨がお濟みになると、私は覺えず再び頭を下げた。殿下には讀了られた文書を再び入江侍従長に御手渡せられ、侍従長がこれをお受けして高壇より二段下に降つた頃に、私は改めて最敬禮をして壇を下つた。壇を上る時は一步一壇と上つたが、下る時は殿下の方へ背を向けない様に體を横にして降るのであるから、足が纏れる様になるので、二歩一壇と刻みながらに降つた。幸にも躓く事もなく無事に

Myself. 和 The The

マツトの上に立つた。そして再び正面に向直り、内記課長に奉祝文を手渡してシルクハットを受取つた。更に再び姿勢を正したる後に、有らんかぎりの大音聲を張上げて、天皇陛下、皇后陛下の萬歳を三唱した。勿論右に持つたシルクハットを高く頭上に舉げた。次いで皇太子殿下、皇太子妃殿下の萬歳を三唱した。數萬の參列者は皆一齊に之に唱和したので、其の歡聲は大内山の若葉を搖がして遠く虚空に反響した様に思はれた。私も此の時ばかりは體力の有らんかぎりの高聲を張上げたのであつた。萬歳の三唱は勿論何の苦もない事ではあるが、さてあまりに懸命になつた場合には却て色々と言ひ謬るものである。特に臍下

丹田に力を入れて落着いた上にも落着いて居ないと、時として間違を言ふものである。殊に「天皇陛下、皇后陛下萬歳」と唱ふべきを、時として「天皇皇后兩陛下萬歳」と言ひ謬る事がある。萬一之を言直すやうな事があつては實に取返しの付かぬ失態である。無事に済んでしまへば誠に當然の尋常事ではあるが、局に當つて見ると中々に氣苦勞なものである。幸に無事に唱へ了つた時は、私も眞に安堵の胸を撫でたのであつた。

私は當面の執行者として、到底此の莊重なる光景を客觀的に觀るだけの餘裕がなかつた。しかし式が済んだ後に參列の人々から聞いて見ると、殿下の御態度が殊に御立派で

あつて、玉音の朗々堂々たるには一同眞に有難涙に咽ばぬものは無かつたさうである。(青嵐隨筆)

三木露風

名は操 一時羅風と號した 詩人 明治二十二年兵庫縣龍野町生

一六 夏の小曲

三木露風

かはせみ 鳴くこゑも、 青葉の露は霽れゆきて、 明くるにはやし、川の宿 づばめ

夏きたりけり、づばくらめ

飛交ふ街の時計臺、

白き正午をさし示す。

白鷺

をぐらき、ふかき森の

隠り沼になく白鷺よ、

河骨の花ほのかに

風の來てゆらぐ夕暮。

一七 巴里より

島崎藤村

島崎藤村 名は春樹 文學者 明治九年長野縣木曾生

暖かい雨が降つて来るやうになりました。来るか来るかと思つて此の雨を待侘びて居た心地はありませんでした。私どもは五箇月も前から旅の冬籠の間、唯そればかり待つて居たやうなものでした。さう申しては何ですが、私どもの周圍にあつたものゝ事を思つて見て下さい。佛蘭西國境の山地寄の方では、塹壕が積雪の爲に深く埋められたとか、戦線に立つ者の霜焼を救ふ爲に毛布を募集するとか、さういふ勞苦を思ひ遣る市民の心が今日まで續いて來ました。開戦以來五六十萬の佛蘭西人は既に死んで居るといふ話です。此の戦争が終る頃には、満足な身體でもつて巴里へ歸

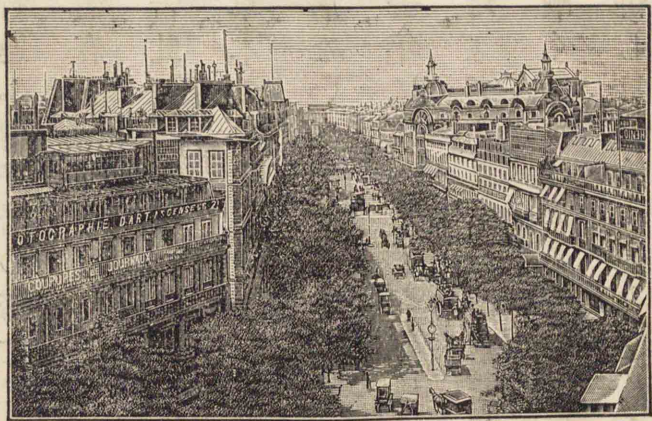
去年
大正三年
プラターヌ
すいかけの木
Platane
マロニエ
Marronnier
とちの木

つて来る者は少なからうといふ話です。私共が町で
行逢ふ留守居の婦女でも、老人でも、子供でも、やがて來
る春を待つて居ないものは無いやうでした。寒苦、寒
苦、此の避け難い戦争の惱みの中で、世界の苦みの中で、
草木の再生がやがて自分等の再生である事を願つて
居ない者は殆どありません。去年に比べると、今年は並木の發芽もずつと後れまし
た。プラターヌの木などは、まだ冬枯そのまゝです。
漸くマロニエの芽がほつくと膨らんで來た所です。
併し日は餘程長くなりました。空も明るくなつて來
ました。もはや煖爐なしに暮せます。一雨毎に、私は

春の來るのを感じます。あらゆる草木が生返る中で、

やがて來る若葉の世界を待つのも楽しみです。あの白い蠟燭を立てたやうなマロニエの花が若葉の間に咲いて、冷たい硝子窓からも、石の壁からも、春の焰が流れて來るやうな日は、最早遠くはないでせう。さういへば、燕のかはりに

レオン、ドーデーの



巴里市街

獨逸の飛行船が飛んで來ました。

レオン、ドーデー
(1858-)
佛國現代の
文學者

三月二十三日
大正四年

言葉ではないが、あの「空中の海賊」が巴里の市中と市外に爆弾を落して行つたのは三月二十三日の夜でした。損害も大した事はなかつたといひます。實は私などはそれを知らずに熟睡して居た位です。「あの昨夜の騒ぎを知つて居るか。敵の飛行船を目がけて撃つた深夜の砲聲を聞いたか」と人に言はれて、始めてさうかと知つた位です。「なぜ獨逸軍はあんな詰らない事をするのか。」斯う人々は言合ひました。「恐らく獨逸軍はそれを何等かの政略に供し、新聞紙上に吹聴し、漸く戦争に疲れて來た國內の不平の聲を鎮めようとするのであらう。」斯う言ふ人もありました。翌二十四日

には、町々の警戒は一層厳しくなり、あらゆる街路の燈火は消されました。そよくと吹く南風が流れて来るやうな夕方でした。淡い新月の光も空にありませんでした。火ともし頃には、や窓を閉めるのは惜しい気が致しました。其の晩は床に就いてから、けたまわしい物音に眼を覺しました。自動車で飛ぶ警戒の喇叭が深夜の町々を駈けめぐりました。翌朝になつて、また敵の飛行船が近づいたことを知りましたが、佛蘭西側の飛行機に邀へ襲はれて、其の晩は巴里まで来られなかつたとのことでした。今は巴里も一時の様に包圍されかゝつた位置ではないし、市は出来るだけの警戒を

ツェッペリン
獨逸のツェッ
ペリン伯が工
夫製作した飛
行船
Zeppelin

三月二十六日
大正四年

近衛文磨

公爵
講和全權委員
貴族院議員
明治二十四年
京生
六月二十八日
大正八年

怠らないし、露西亞の戦報は、埃太利方面の勝利を傳へて居る際です。獨逸のツェッペリンが襲つて来たといつても、他で聞き、電報で傳へられる程の騒ぎでもない事を申し上げたいと思ひます。七時の夕飯時も来ました。今一回此の御便を書き足したいと思ひますが、今日はこれで筆をとめます。

三月二十六日

(戦争と巴里)

一八 平和は成れり

近衛文磨

六月二十八日、朝來暖煙軽く揚りて、曉風爽かなり。市街は各國の國旗を以て美々しく飾られ、幾組となき行列ビープ

Vive La France!
フランス、ラ、
佛國萬歳

ヴェルサイユ宮
佛國巴里の西
南十一哩ウエ
ルサイユ市に
ある宮殿
ルイ十四世の
建てたもので
世界第一の立
派な宮殿とい
はれてゐる

ラ、フランスを唱へて旗を振りつゝ市中を練歩き、自動車の
ごときも、亦思ひくゝに装を凝らしたり。憶へば過去五箇
年の間、砲彈の音に、敵機の襲來に、心膽を寒からしめし事そ
も幾度ぞ。今や乾坤一轉して、藹然たる瑞氣の搖曳するを
見る。巴里人の今日の喜や、實に想察するに餘りありとい
ふべし。

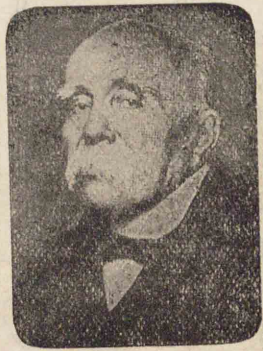
此の日ヴェルサイユ宮附近の混雜は名狀すべからざるも
のありしが、宮殿正門前の大通は箒目正しく掃き清められ
て一切の通行を禁じたれば、一點の塵をも止めず。兩側に
堵列せる共和衛兵の銀色の兜と白き鹿革の袴下と黒く光
れる長靴とは光彩陸離として、莊重なる此の日の儀式をい

クレマンソー
佛國の前
首相
Wilson
米國の前
大統領
Lloyd George
英國の前
首相
ロイドジョージ

やが上にも莊重ならしめたり。午後三時、各國全權委員は
皆已に入場し、招待を受けたる人々及び新聞記者等も亦、處
狭きまでに詰込みて、さしにも廣き鏡の間も、些かの餘地だ
になかりしが、今は近世の歴史に最も光輝ある儀式を前に
控ふる事として、流石に咳一つ聞えず、滿場静まり返れり。

見渡せば、庭園に面して置かれたる長き卓子の中央には、ク
レマンソー氏例の如く椅子に深く腰をおろし、向つて左に
はウイルソン大統領を始として米國委員、次に伊太利委員、
次に白耳義委員あり、またク氏の向つて右にはロイドジョ
ージ氏を始として、英本國委員、次に英植民地委員、次に我が日
本の委員西園寺公爵を始め、順次に居流れたり。いづれも

Frock-coat
フロックコート



イソンマレク



ンソルイウ

黒のフロックコート姿にて、華麗眼をそばだてしむるもの
 とては一も見當らざりき。更に眼
 を轉じて窓外を望めば、正面の有名
 なる噴水池の周圍には、共和衛兵圓
 陣をなして整列し、其の背後には、特
 に今日に限り庭園まで入るを許されたる幾千の人々堵の
 如く並びて、調印の終るを今や遅し
 と待構へたり。
 午後三時を過ぐるごと五分、向側の
 扉は開かれて、滿場の視線一時に其
 の方に注がるゝや、やがて、二名の獨逸委員は幾多の佛國將

Bell Müller
ベル ミュラー



ジョージドロ



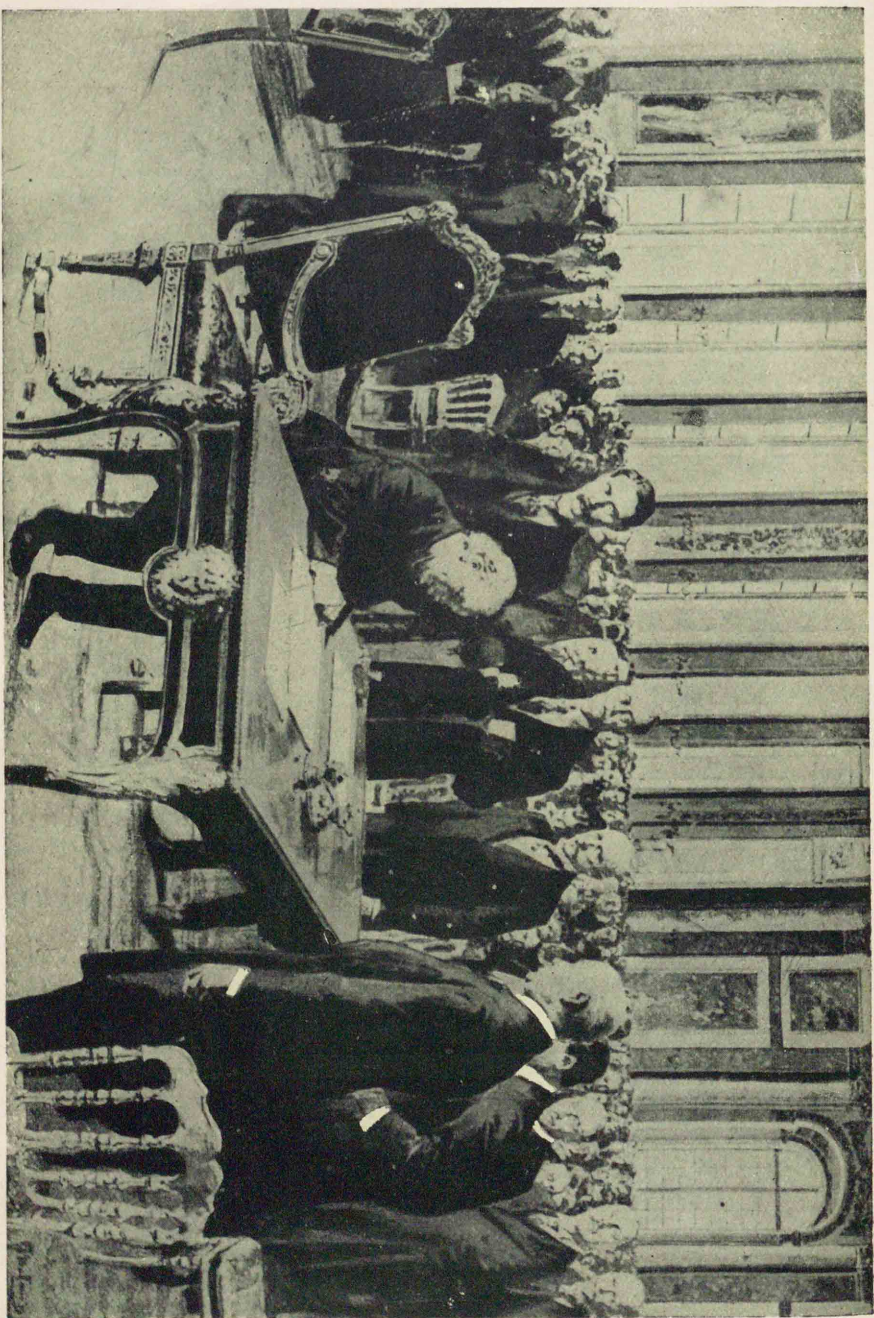
西園寺公望

校に見守られつゝ、入場し來れり。先なるは新外相ミュラ
 ー氏にして、後に續けるはベル氏な
 り。何れもフロックコートを着し、
 稍、俯向き勝に極めて物靜かなる態
 を粧ひつゝ、日本委員の隣なる定め
 の席に着けり。席定まるや、クレマンソー氏は徐ろに起ち
 て、先づ獨逸委員より調印すべき旨
 を告ぐ。是に於て獨逸委員等はや
 をら起ち上り、案内せらるゝ儘に、ク
 レマンソー氏の直前、條約の正文を
 置かれたる卓子の前まで歩を運べり。

Moltke (1800—1891)	モルトケ 獨逸の 名將	Bismarck (1815—1898)	ビスマルク 獨逸の大 政治家	William (1997-Js 3)	ウイリヤム老帝 獨逸の 英主
-----------------------	-------------------	-------------------------	----------------------	------------------------	----------------------

彼等は平靜にして殆ど何等の痛痒をも感ぜざるが如き態度を以て前に進み、代るく條約の正文に署名したり。其の間僅かに二三分時のみ。嗚呼幾百萬の人命と幾千億の財貨とを犠牲として漸く贏ち得たる最後の結果はかくの如きか。獨逸の運命はかくして定まり了んぬ。見よ、自席に歸り行く二人の黒き姿の淋しくも憐なるを。之を彼の五十年の昔、同じ此の大廣間に於て、ウイリアム老帝がビスマルク・モルトケを始め雲の如き賢臣名將に圍まれつゝ、威風堂々として四邊を壓倒したりし當時と對比し來らば、何人か心中無限の感慨に打たれざるものあらんや。

獨逸委員の座に復するや、ウイルソン氏先づ座を立ち、續い

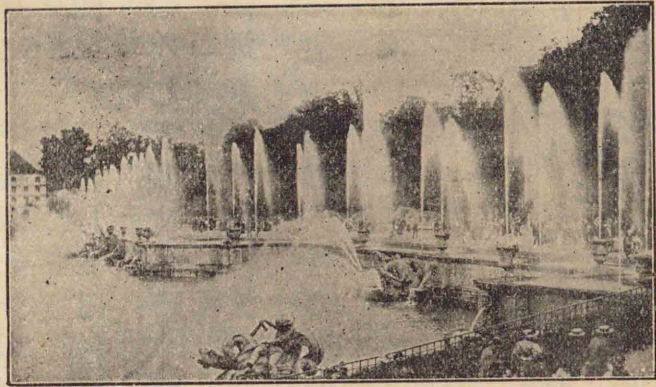


約條和平のユイサルン

ウルグアイ
南米東南
部の共和
國

Uruguay

山東問題
日本が獨逸の租
借權を繼承して
經營してゐる山
東省の青島を支
那に還附する事
についての問題



水噴宮ニイサルエヴ

て四名の米國委員之に従ひ、同じ卓子に至りて署名せり。

次にはロイドジョージ氏を先登
として英本國委員、次に英植民地
委員、次に佛國委員、次に伊太利委
員、次に日本委員の順序にて、各一
團づつ代るゝ其の卓子に於て
署名し、かくて最後のウルグアイ
委員に至る迄、時を費すこと四十
三分、調印を了したる國々は、山東
問題に關する要求の容れられざ
りしを理由として之に加らざりし支那を除き、凡て二十六

箇國、調印の全く終りしは午後三時四十九分なり。
 是に於てクレマンソー氏肅然として起立し、莊重にしかも
 簡單に宣言して曰く、「平和は今や成れり」と。此の時世界に
 類なしと稱せらるゝヴェルサイユ宮庭園の大噴水は一齊
 に迸り出で、殷々たる百一發の祝砲は宮殿の内外に蝟集せ
 る幾十萬の人々の歡呼の聲と相應じて、新なる世界の出現
 を祝しぬ。(戰後歐米見聞錄)

徳富健次郎

文學者
號は蘆花
明治元年熊本縣
生

一九 九十九里濱

徳富健次郎

潤さ一町餘、長さ十六里半の此の大きな砂濱は、人の子の生
 活の戦場で、同時に其の遊び場でもあります。風雨の中の舟

大東
大東崎
千葉縣夷隅郡大
東村にある岬
飯岡の岬
千葉縣海上郡飯
岡町にある岬

の引揚げ、一時を争ふ漁舟の乗出し、地曳の網のあがりぎは、
 男は赤裸、女は眞顔で曳々聲を出す時は、自然を相手の戦争
 といふ感がひし〜と人を壓します。併し風雨が過ぎて
 二三日、右に大東、左に飯岡の岬も歴々と見えて、空青々と、日
 麗らかに、心地好い程の南風がそよ吹いて、萬里一碧の海の
 笑顔に愛嬌ばかりの白波を立てる日は、向ふの方でながら
 め貝を搔く男も、無禪の赤裸で子供の風呂桶程ある飯櫃引
 寄せて、立ちながら茶漬を食つてゐる赤銅作の仁王様も、一
 張羅の晴着を汗にしまいとして、それを風呂敷に包んで負
 つて、紅い襦袢一つになつて波打際を行く田舎娘も、街道の
 砂ぼこりに引換へてしつとりと弾力ある波打際の砂路を

荷馬車挽かせて行く向鉢卷の男も、自轉車の小僧も、砂の上に坐つて日がな一日のんきに網を繕つてゐる爺さんも、子供のおもちやに小蟹をとらうとして懸命に兩手で穴を掘つてゐるかみさんも、人形のやうな兩手を舉げて家鴨の蹠のやうな兩足でよろこび走つて來る三歳の女兒も、それらを見てゐる私共も、鬼がゐない賽の河原の砂遊をしてゐる一様の子供としか思はれません。まことに人生は嚴肅であります、そして又快活であります。

此の砂濱は又大きなカンブスであります。色々のものが色々のものを描きます。風が掃ひ、雨が流し、波が洗ふに任せてゐる此のカンブスの上に、勿論不朽とか無窮とかは許

カンブス
Canvas
畫布

されません。しかし刹那のものにも人間の不朽よりめでたいものはあります。第一にめでたい波の手の跡を御覽なさい。波は生きてゐます。活きた波の手の跡に、波の氣分の顯れてゐないのはたゞの一筆だつてありません。彼は好んで砂をしゝらに織ります、松皮模様を描きます、鱔皮を作ります。朽木型、鉋をかけた玉目形。頗る意氣な綾や縞も彼の手づくりです。人の足跡、子供の足跡、轍の跡、馬の足跡。大きな梅花模様は犬が行くくく描いたのです。不具な楓の三本趾、鳥にしては大勝なのは鳥に違ひない。ひよいひよいくとやゝしばらくつゞいて、何かに驚いてばつと飛立つたげであります。小さなくく模様の、小刻みに

右につゞいて左に折れ、また翻つてもとへ戻つて居るのは、千鳥か何ぞの心の曲折を語つてゐます。蟹の足跡があります。貝のあるいた跡があります。ある時、小さなく、刷毛でばつばとかいたやうな織いゝ半月形を、これは何だらう、一體何が描いたのだらうと、よく見て居ると、龍の鬚に似た小さな草がそ知らぬ顔して、私ぢやありませんと織い首を掉つてゐました。

九十九里に往つた最初は七月といつてもしけがちで、此の大きな海を前に控へながら、毎日豆腐や、粕谷から持參の甘藍、豌豆、伊香保の乾蕨の類ばかり食つてゐる日が續きました。その内二週間も経つと、七月も半ばになつて、鱈の地曳

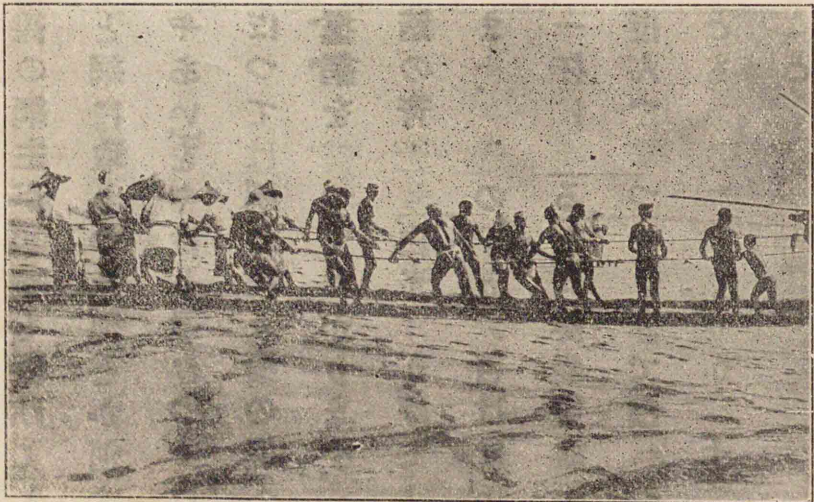
粕谷
東京府北多摩郡
千歳村の大字
東京市の西三里
作者の居住地
伊香保
群馬縣群馬郡伊
香保町
作者は九十九里
濱へ行く前に伊
香保に遊んだ

網が始りました。私共の歸る頃は鱈も大きく、味も大分よくなつてゐました。朝暗い中から拍子木が鳴ります。それは地曳の始る知らせです。私が浴衣一枚で海浴に行く頃は、大抵もう曳き始めてゐました。よく風いだ朝などは、地曳の組が、幾組もく、南に北に並んでゐます。霧の中にも、小さく見える組も、う眼に入らぬ遙かなく、組もあります。なる程九十九里は大きな濱です。

腰と踵に力を入れて、急がず休まず永劫につゞくかのやうにじわく、曳くのも、見てゐて力が入るものですが、網の目標の浮樽が見えて來てからの活氣はまた見物であります。小一町も離れて曳いてゐた南北二列の曳子が、追々近寄つ

て来たかと思ふと、一方の列が綱を抱へながら、えつさくと他の一列の方へ駈寄ります。鉢巻の赤裸男がざんぶと海に飛込んで、綱元へ廻ります。棒手振が寄つて來ます。やつさ籠が幾つもく、並べられます。波打際では、其方曳け、此方しぼれと、綱主が罵りわめいてゐます。私共も砂の上から立上つて、そろく波打際へ向ひます。もう綱は盡きて、繩網が見えて來ました。其の或ものは向鉢巻、腰膚脱いだいゝ加減な婆さん、かみさん、娘までがざぶく海に飛込んでいつて、件の繩網を攫んで、一抑一揚、歌で拍子を取りながら引張ります。名物の地曳歌はこれです。中でも年配の女が金切聲で音頭を取ります。皆がつゞいて囃しま

す。彼一句、此一句、歌つては曳き、曳いては歌ふ。抑へて、揚げて、かゝんで、伸びて、右の片足をひよいと上げて、拍子も調子も面白く、綱は段々上つて來る。一様な節の間々に、何とか何とかやあい。と一齊に囃すときの面白さ。もう綱が見えて來ました。綱の繼目を全速力で解く。海に



網曳地の濱里九十九

潜つて網の囊をしぼる。眞裸の網主が咽喉も裂けよとわめく。一切の男女はぐるりと網に取りつき、何とか何する、何とか何せい、何とか何とかやあい、をやはり歌ひつゞけながら、網を手繰つては匆ね、しほつては匆ね、段々囊の底へ魚を寄せて行きます。子供が攪網かきを持つてたかります。もう網の中は、さつきから鱈や鯖の青光り、白光りが、ばたく、ばたく、ごつたかへしてゐます。鱈の千五六百ははいるやつさ籠が持つて來られて、一杯になると、向鉢卷、雙肌脱ぎの女たちが二人で籠の縁を攫んで、「やつさく」で濱へ持つて行きます。どうと置くこともあり、ひつくりかへすこともあります。いやもう盛なことです。

地曳通ひは私共の日課でした。私はかく自ら嘲りました。

地曳すればわれも鷗と飛んで來つ、

魚獲んとして去りがてにする。

拍子木が鳴ると、いそぐ飛んで濱に行き、獲物を手に入れるまではうろついて立ち去らぬ私は、魚欲しさうに地曳網の中を往つたり來たりするあの鷗や、みさごや、かいつぶりさんたちに似寄つたものでした。(新巻)

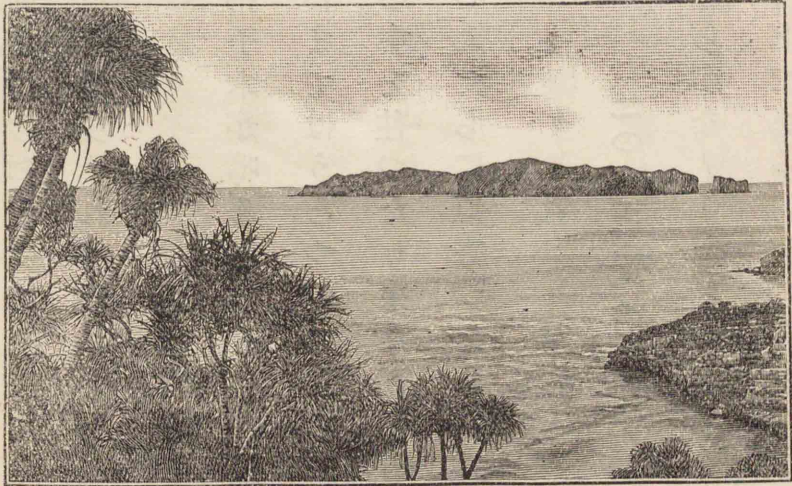
二〇 正覺坊

北原白秋

麗らかなく、何ともかともいへぬ麗らかな小笠原の夏の一日である。宮の濱の白い弓形の渚から影の青いバナ、

宮の濱
小笠原父島の北
にある小灣

Banana
バナナ



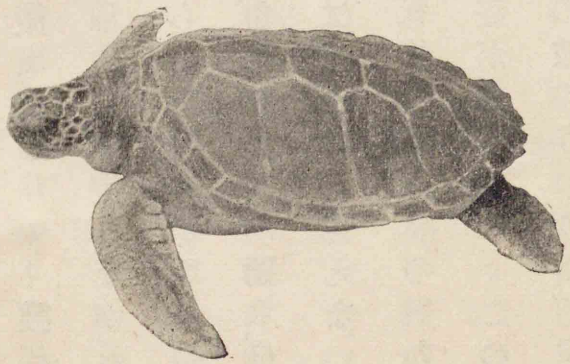
小笠原島

畑の方へ上り上る小徑
のそば、小灌木林の境界
線に近く、一本の光り輝
く護謨の大樹が高く高
くゆらめいてゐる。そ
の下に大きなく、正覺
坊がゆつたりと眞圓い
卵色の腹の甲羅を仰向
けて轉がつてゐる。無
論、四肢は固くゆはへら
れてゐて、それを動かす

ことも出来ない、大きなづうたいに二條の太い荒繩まで
がぐるく、巻きにくひ込んでゐる。それでなくとも一旦
ころがされたが最後、一日か、つて起きかへるか、二晩か、
つて起きられるか、この鷹揚なよろくの海龜の身では頗
る怪しいものである。嬉しいのか、悲しいのか、苦しいのか。
又は到頭諦めて了つたのか、それぞと云ふ氣分も見えない。
たゞ首を當り前に出して、當り前に目を開けてゐる。そし
て何の事もなく空を見入つてゐる。尤もそれも仰向いて
ゐるから、目が空に向いてゐるといふだけである。澄渡つ
た明るい空の景色を視つめてゐるのか、又は麗らかな雲の
ゆき、や風の流れに恍惚としてゐるといふのか、それとも、

檳榔椰子、バナ、など種々の熱帯の植物の匂に現心もなく
酔ひしれて、懐かしい生れの海の波のまにまに、
靈魂を漂はしてゐるのか。何が何とも譯の分らぬ夢見るやうな眼を
開けてゐる。

時は正午である。五月と云つても小笠原の五月は暑い。
太陽が直射して、愈々護謨の大樹の眞上から強烈な光の嵐を
浴びせかけると、燦爛たる護謨の厚葉が枝々に限もなく重
なり合つて、眞青な油ぎつた反射を影と共に空一杯にゆら
めかす。その葉を潜つて来る光線は鋭い原色の五色であ
る。それが幹に當り、下に寝てゐる正覺坊の腹を燬きつけ
る。そして愈々緑と黄との點々に模様づけられた綺麗な海



坊 覺

龜の頭が軟かな雜草の上に更につやくと光り出し、麗ら
かな麗らかな、何ともかとも言へぬ空のあたりで、檳榔の葉
がそよぎ、鶯の鳴く聲がきこえて

あくる。あつて眠る。おんな光りた。

正 十方無碍光——澄み輝く白金寂
寞世界の一時である。

正覺坊は眩しさうに目を開けた
り閉ぢたりしてゐる。現心もな
いらしい、たゞゆつたりと、轉がさ
れてゐるので轉がつてゐる。大
安心のかたちである。恐らく自分が囚れの身である事す

ら忘れてゐるに違ひない。微風がをりく、護謨の枝々をそよがせて去つた。幹の中間にひと流れながれた海の美しさ。向ふに兄島が見え、麗らかな麗らかなその瑠璃色の海峡を、早瀬に乗つて、白い三角帆をあげた獨木舟が走つてゆく。さりながら正覺坊には其の海が見えない。頭を海の方に向けて寝てはゐるが、背後には護謨の樹の幹があり、海岸には煙草の毛深い葉の叢がある。たゞこの島の四方八方を取圍んでゐる太平洋の波のうねりが、何處からともなく緩い調節を間のびに折り疊んでゐる。それだけは流石正覺坊の遲鈍な感覺にも何等かの響を傳へるらしい。正覺坊は目を瞑つてまた日

を開いた。

こけつこつこ、こけつ……こけつこつこ、こけつ……物に驚いた雞の鳴聲が丘の下の農家の方からきこえて来る。畑の甘蔗やバナナの葉かげをわけて此方へ逃げて来るらしい。一羽、二羽、それが次第に近づくに連れて、鳴聲をひそめて来るかと思ふと、一羽の雄雞がやがて雄姿を現した。雞冠の赤い、骨つ節の強さうな、羽色の眞黒い、はちきれさうにいきみかへつた驕慢な雄雞にひかされて、白い舶來種の雌雞が、何か啄みながらついて来る。そのとたん、奇怪な大きい正覺坊のづうたいがふいと前に轉がつてゐるのが目についた。と、たちまち驚の叫を立て、けけつこつつけ、けつ

けつこつけ、けつけ、けと逃げてゆく。そして又一しきり忙しさうな叫聲が甘蔗の向ふから聞える。正覺坊はそれでもゆつたりとしたものである。平氣で大空を見上げてゐる。溫和さうな空色の瞳がつやくと潤みを持つて、たゞじつと麗らかな空の景色を見入つてゐる。恐らく傍に何事が起つたかも知らないであらう。身動き一つしようとしなない。時が経つた。日射は愈、強くなり、音も絶えた空氣の中を、鶯の子が苦しさうにさゝ鳴きをしてはまた光つて消えた。

(白秋小品)

本能寺

この時は京都六角南油小路東にあつた今は寺町通押小路南にある

高松城

岡山縣吉備郡にあつた當時の守將は清水宗治

吉川・早川

吉川元春と小早川隆景

池田紀伊守

池田信輝

惟任日向守

明智光秀

高山右近

右近大夫高山長房

二 本能寺の夜嵐

千生瓢の馬印を朝日に高くきらめかせ、莞爾として西を指した猿面冠者が鋒の鋭さ、朝に一砦を抜き、夕に又一城、中國見るく馬蹄の塵よと見えし程に、毛利の運命を背負つて立つた高松城が地の利に據る勇將猛卒の防禦の固さに、勝に乗つたる勢も頓に弛んで、流石の秀吉も唯迂遠な水攻の外に策の施しやうもなかつた。其の中に名に響きたる吉川、小早川の兩雄が自ら大軍を率ゐて向ふと聞くや、急使は京都に飛んで連りに援軍を求めた。信長の血は涌立つた。しをらしき毛利が少年等よ。いでや目にも見せてくれうず」と先づ池田紀伊守父子、惟任日向守、高山右近等を打立

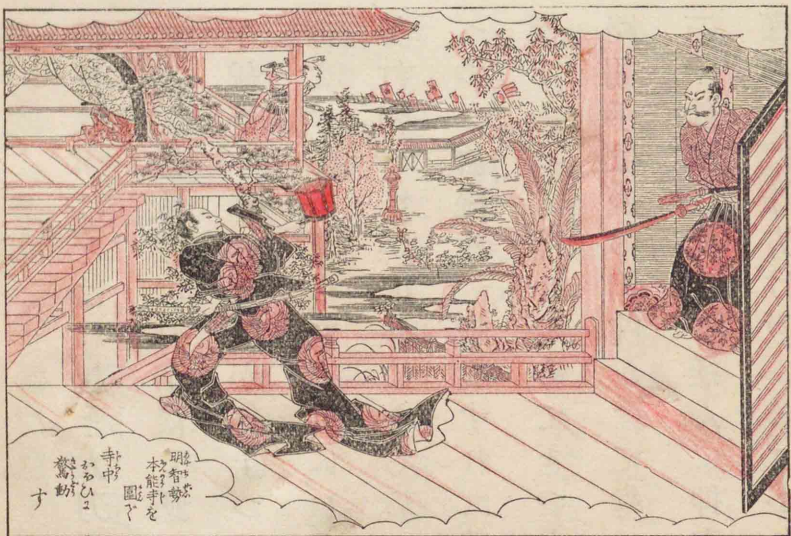
天正十年
正親町天皇の御
代。(三四)

安土城
滋賀縣蒲生郡安
土村にあつた織
田信長の守城

長光寺の城
滋賀縣蒲生郡武
佐村の西にあつ
た柴田勝家の守
城
幸若
桃井幸若丸直詮
の創めた幸若の
舞を舞ふ役者

たせた。而して自らも右大臣の衣冠をかなぎりすて、出陣の命を傳へて、手兵と共に本能寺にやどつたのは、天正十年六月一日であつた。

錦帳深く鎖し、蘭燈影淡きとき、彼はどんな事を夢みて居たらう。安土城の春の夜の宴、青海の波を敷けるがごとき千疊の大廣間にずらりと居ながれた大紋立烏帽子、毛利もゐる、島津もゐる、北條も伊達も、長曾我部も、天下の群雄悉く我が前にひれふしてゐる。漆黒の髯を逆手に撫であげつゝ、蛇眼空を睨んで長光寺の籠城を物語る柴田勝家、赤い顔を一入赤くして近く打立つべき大明征伐を豪語する豊臣秀吉。やがて幸若が舞ふ御代萬歳の一手に廣間の銀燭が皆



變を聞いた信長 (繪本豊臣功記)

一齊にきらめきたつと、花の吹雪が長廊の朱欄にみだれて、廻る杯にも花片がひらくと舞ひこんで来る。

「殿。殿。大事でござりまする。」

ふと眼を覺すと、たゞならぬあたりの氣色、何事ぞと枕を敲てる時、

「惟任日向、謀叛と相見え

まする。」

信長はがばとはね起き、太刀片手に廊下に走り出でた。曙の空には上弦の月が淡く懸つてゐた。見渡せば彼方の地平線から赤い土煙が舞上つて、何處よりともなく涌出で揺りよする人馬の音と共に、見る／＼間近く寄せた先手の軍勢、打物の影が仄かにきらめいて、未明の光に翩翩とひるがへつた旗幾旒。諦視すれば、咄まぎれも無き水色桔梗の旗標である。瞳を定めてきつと見てあれば、追手は六角油小路、搦手は西の洞院かけて犇々と引包み、明智左馬助光俊が三千餘騎は揉みに揉んで押寄せた。顧みれば味方は數ふるばかり、誰か此の大變を期し居らう。

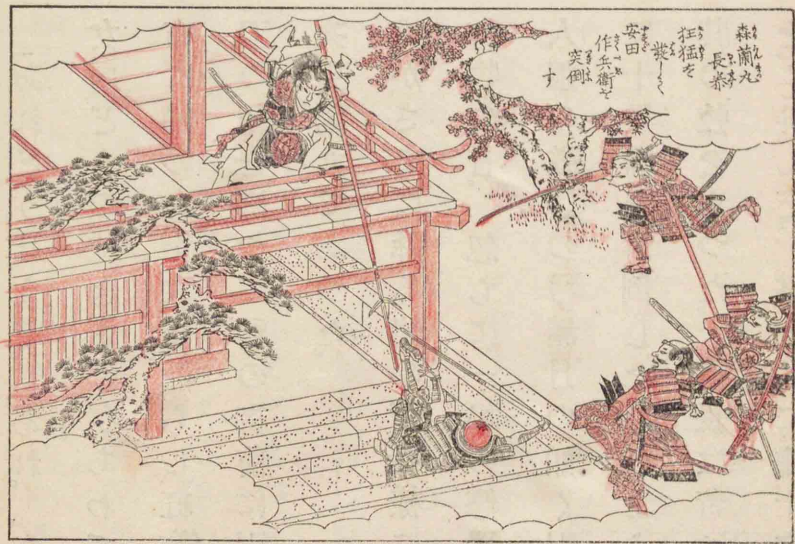
明智光俊
一に光春
光秀の従兄弟

「あれどうせうぞ。あれ。あれ。」

女房どもの泣きさけびあわてまどふなかを、栗梅の越後上布に鶴の丸を大小散らし、紅梅練の大口のそば高くとり、太刀の鞘を拂つて君の御前に引添うたるは、森三左衛門尉が次男蘭丸であつた。

森三左衛門尉
名は可成

さかさまに降る焰の雨、横様にしぶく血潮の風、矢叫びの聲、打物の音。忽ちに一場の修羅の巷は現出した。信長は五人張の滋籐の弓、満月の如く引絞り、矢をつがへ／＼見るまに十數騎を射倒した。ひようと飛んで來た矢はぶつりと其の弦をきつた。信長は苛つて弓を投捨て、槍を持って。槍を。と叫んだ。聲と共に鎌十文字の鞘を拂つて捧げたのは



森蘭丸作兵衛を助功記

間部六郎太夫の妹であつた。信長は白綾の單衣を焰と血潮に彩らせて忿怒の形相すさまじく、阿修羅王の荒れたる如く突立て突立てたが、再び飛び來つた矢はぐさと右の肘に立つた。

今ははやすべきやうも無い。顧みれば小川愛平金森義入・魚住勝七等侍衛の

臣も皆斃れた。身邊は悉くこれ火・血・矢・白刃・黒煙。あゝ我が事畢んぬ。

信長はからりと槍を抛つた。而して眦を裂いてきつと寄手の勢を睨んだ。

「おのれ、おのれ。おのれ日向が振舞よな。」

「殿、御刀の汚れにて候。雑卒ばらの手にかゝり給はゞ、未代までの御恥辱にて候。某御跡引受け候。彼方に御入ありて御腹召させ候へ。」

戦ひ疲れた蘭丸が、深傷淺傷に打喘ぎつゝ、かくと諫めたので、信長は書院の方へと引退いた。が、其の影の、焰の光で紙障子に映じたのを目當に、敵の一卒が突き出した槍の穂先

にぐさと脇腹を貫かれて斃れた。
蘭丸は弟坊丸・力丸と共に目ざましく戦つて君の御後を追ひ奉つた。

あはれ信長が功業はばつと咲いた櫻の花のやうに華々しかつたが、その末路も亦、夜半の嵐に散る花の如くはかないものであつた。(歴史小品最後の二節に據る)

三二 豊臣太閤秀吉

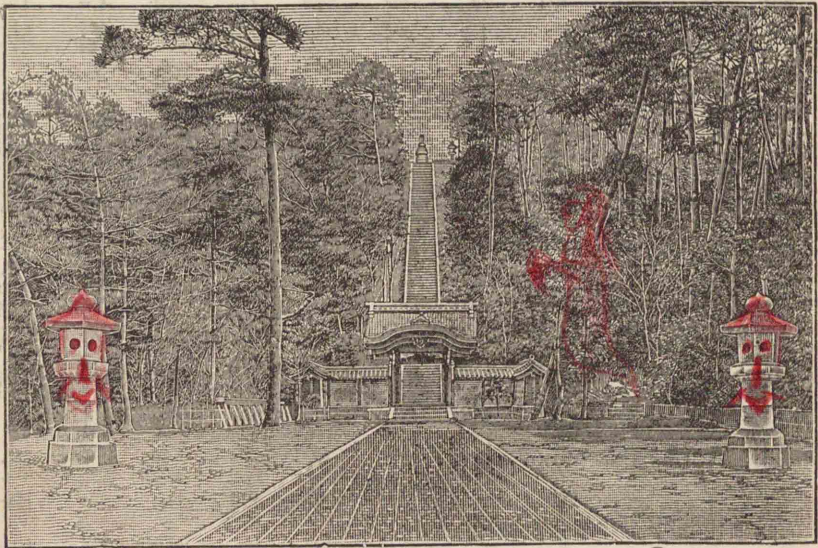
三 上 參 次

從來豊臣太閤の人物事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記・繪本太閤記等の書にして、三國志・漢楚軍談などと共に普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、亦講談師の

三上參次
歴史家
文學博士
東京帝國大學教
授
慶應元年(二五五)
兵庫縣生

種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、惜しいかな、此等の書には、武邊の偉人としての太閤は稍、描き出されたれども、其の他の側面は殆ど全く忘却せられたる如く、まゝ又いみじき誤謬をさへ傳へたり。太閤が無學文盲の人と傳へられたるが如き、其の最も著しき例證なるべし。

磨けば益光り、鑽れば彌堅し。眞に偉大なる人物は仔細に研究するに従ひて一層其の光彩を放つものなり。予は今太閤が一面にては雄才大略の人なりしと同時に、一面には決して無學文盲にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。抑、太閤は一代の事蹟頗る多く、事業の規模甚だ大なり。故に舊



大名たりし華族の諸家
 古社寺・舊家等に太閤の
 文書の傳へらるゝもの、
 其の幾千なるを知らず。
 公の祐筆たりし太田和
 泉守牛一・大村法橋由己
 等の文章家の手に成り
 廟 たると思しき、雄健にし
 て生氣に富める文書其
 の大部分を占めたりと
 はいへ、確に太閤の自筆

江村專齋
 名は宗貞
 儒醫
 寛文四年(三三)
 歿
 年百二十
 醒醐
 京都府宇治郡醒
 醐村
 醒醐寺の所在地

なる色紙短冊消息の類も亦少なしとせず。西に東に遠征
 せる先より、母なる大政所、夫人なる淺野氏、若しくは秀頼等
 に贈りたる書狀の如きは、親子夫婦の間柄の事なれば、もと
 より祐筆に託すべくもあらず、皆自ら筆を執りたりしなり。
 書狀に用ひたる文字は大抵平假名なり。書體及び筆力に
 清婉秀潤等の讚美の辭を加ふることこそ敢へてする能は
 ざれ、頗る圓熟したるものにして、その中自ら峻拔の氣象の
 あらはるゝを見る。漢字もまた用ひられたるが、其の崩し
 方も無下に卑しからず、嘗て習字せしことの無き人には、決
 して能くし得るところに非ざるなり。江村專齋の「老人雜
 話」に、太閤の祐筆が醒醐の醒の字を忘れて、とみには思ひ出

筆蹟

一かたんと思へ
はかつまげんと
おもへはまくる
心次第のものと
きかせよ
月みればもろこ
し人の心さへそ
らにしらるゝ
よはの秋かき
秋の夜はかな
夕ぐれかき
八月十一日
豊臣秀吉

一かたんと思へ

はかつまげんと

おもへはまくる

心次第のもの

きかせよ

月みればもろこ

し人の心さへそ

らにしらるゝ

よはの秋かき

でざりしを、大の字を書け
よといひし談を記せるは、
太閤の簡易を喜び、敏捷を
尙びしをいへるにて、少し
も漢字を知らざりしをい
へるには非ず。
軍陣にての消息などは、咄
嗟に文章を成したるにて、
字句の鍛錬なしといへど
も、天真爛漫、辭簡にして意
達し、少しも凝滞する所な

小田原在陣

後陽成天皇の天
正十八年(三三三)
八月秀吉は自ら
北條氏政を小田
原城に攻めた

し。而して、その間に溢るゝばかりの愛情あらはれ、趣味の

津々たるものあるを覺ゆ。天正十八年小田原在陣の中に

母なる大政所へ上りし書中に、「そもじさまは御ゆさん候て、

きをもなぐさみ、わか御なり候て可給候。たのみ申候。」

の語あり。千言萬語を費すとも、子の親に對する愛情は此

の「若くなり給はれ。」の一語より適切なるものはあらじ。又

その夫人淺野氏への書中には、「ねんごろに文給はり、御げん

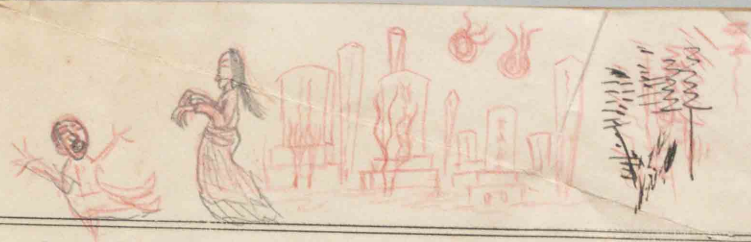
さんのこゝろしてねんごろにみり。」ことし内にはひま

あけ可參候。心安く候べく候。かならずとし内に參り候

て御目にかゝり、つもる御物がたり可申候。等の句あるなり。

祐筆の手に成りたる文書の中にも、かしここゝに太閤の口

rolling



撥亂反正
撥亂世一反正諸
正、英、近、於春
秋、(公羊傳)

天正十四年
正親町天皇の御
代(三四六)

授に係れりと思はるゝところあり。固より千軍萬馬の血
腥き中に成長したる人の習なれば、太閤も多少殺伐粗暴の
氣風ありしを免れず。然り、撥亂反正の功を奏するには、多
少かゝる氣風の必要もありしなるべし。しかも古文書の
上より觀察するとき、太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あ
り、將卒に對しては最も慈悲の念に富みたる善良なる紳士
なりしを見る。〃
さて太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十八日、太閤
禁中に伺候しけるに、九重の櫻花今を盛と咲亂れたるを愛
でて、其の下に徘徊せり。後陽成帝遙かに之をみそなはし
てにや、畏くも敕使を遣はし、花の折枝に一首の御製を添へ

北山

京都府葛野郡衣
笠村大字北山
龍安寺
山號は大雲山
臨濟宗
京都府葛野郡花
園村にある

文祿三年
後陽成天皇の御
代(三四七)

て下し賜ひしかば、太閤感佩に堪へず、即ち

忍びつゝ霞とともにながめしも、

あらはれけりな、花の木のもと

と返歌を上られき。又十六年の事なりけり、北山に狩して
龍安寺に憩へることありき。頃しも春の最中なりけるに、
庭前の枝垂櫻未だ綻びず、却て淡雪のちらくゝと降來りし
かば、太閤おもしろく思ひて、

時ならぬさくらの枝にふる雪は、

花をおそしとさそひ來ぬらん。

と詠まれき。感興想ふべし。文祿三年諸大名を率ゐて吉
野の花見を催されし時、關屋の花の下にては、

藏王堂
又金峰神社
吉野山中金峰山
下にある
本尊は金剛藏王
權現

紀州征伐
天正十三年秀吉
が紀伊根來寺を
伐った戦



醒 鬪 の 花 の 見

吉野山たれとむるとはなけれども、

今宵も花のかけにやどらん。

と詠じ藏王堂にては、

歸らじとおもふ家路を入相の

かねこそ花の恨なりけれ

と歌はれたり。巧を弄ばずしてなかくに雅趣に富み、格調も亦平凡ならずして、古の撰集の中にも置きたき心地せらる。 // 4

此の他、紀州征伐の時には和歌浦・玉津島にて、小田原陣のりには清見潟にて、征韓の役には肥前の名護屋などにての詠歌も少なからず。天正十六年の聚樂第への行幸のとき

大佛
奈良東大寺大佛
殿

慶長三年
後陽成天皇の御
代(三五〇)

は勿論醍醐の花に、大佛の月に、その折々の歌多く、時として
は大宮人の昔を偲ばしめ、又時としては古英雄の横槩賦詩
の面影を想はしむ。而して功成り名遂げたる此の千古の
偉人も、亦無常を感じたる事のありてにや。

露とちり雫ときゆる世の中に、

何とのこれる心なるらん。

と嘆きしこともありしが、慶長三年八月薨去せらるゝや、あ
はれにも、

露とおき露と消えにし我が身かな、

なにはのことは夢のまた夢。

といふ辭世の短冊をとゞめられき。げに太閤は伊達政宗

細川忠興等と同じく、其の頃の武人にして文藻ありしうちの錚々たる者なりしなり。
 確かに太閤の自筆と認めらるゝ消息若しくは短冊にして、予が原本を目撃したるものゝみにても、二三十はあるならん。加之、太閤は、時には學者をして往事を談せしめて之を聽き、又禪學の書の講義をも聽きたりき。我が國人が誇るに足るべき此の大偉人は決して無學文盲ならざりしなり。

(豊太閤に關する研究)



二三 歌話

中邨秋香

あがたの宿

中邨秋香
 國學者
 靜岡藩士
 宮内省御歌所寄人
 明治四十三年歿
 年七十

延享

櫻町天皇の御代

(1704-1707)

賀茂眞淵

國學の大家

遠江の生

江戸に住む

明和六年(1769)

歿

年七十三

筆蹟

もろこしの人に
 見せはやみよし
 のよし野の山
 のはなのさかり
 を 眞淵

延享某の年の秋、江戸大風雨にて市中處々の人家破損しけるあけの日、賀茂眞淵翁の許に、門人某見舞に行きけるに、翁の家も夜來の風にて屋根大方吹きまくられ、日光席にさし入り、屋根板狼藉たる中に、翁は平常に異なるさまもなく、机に凭りて沈思吟詠せり。「烈しき風雨にも候ひしかな」とい

あがたの宿
 中邨秋香

ふ聲を聞き、始めて某の來れるを知りけん、顧みて會釋しつ
 つ餘談に及ばず、此の嵐にて一首出で來ぬ。とて、書きて示し
 ける歌。

野分してあがたの宿はあれにけり、
月見に來よと誰にいはまし。

燒野の原

天明の火災にて小澤蘆庵が家危くなりし時、翁人々に告げ

一三
かきよ
よ
やまをなくきたる空に影みえてゆくともみえず
霞夜の月 蘆庵

天明の火災
光格天皇の天明八年(一四〇)京都大火
皇居も炎上した
小澤蘆庵
京都の歌人
享保元年(一四六)歿
年七十九
筆蹟
かすめる月かける空に雲もなくきたる空に影みえてゆくともみえず霞夜の月 蘆庵

て、他の品は皆焼きても苦しからず、只書籍だけは一冊も多く出し給はれ。とて、自身も年來の鈔録本を風呂敷包にし、これを負ひて太秦なるるべの家へ避けぬ。この火にて内裏の炎上せしよしを聞き、いたく歎きて、翌日未明に太秦を

太秦
京都府葛野郡大

秦村
京都の西郊にあ

出で、内裏の燒跡を拜し奉りて、
今朝見れば燒野の原となりけり、
これや昨日の玉しきの庭。
とりゐ坂

白河樂翁公
名は定信
田安宗武の第七子
白河の城主松平定邦の嗣となつた
文政十二年(一八三〇)卒
年七十

白河樂翁公年十二にて猶田安の邸におはせし頃、麻布鳥居坂なる戸川内膳の邸宅より火起り、その邊の町家類焼しけり。大火にもあらざりしかど、燒死せしもの多かりしかば、この火事は人の命をとりゐ坂、
これより上のとがはないぜん。

と落首せる者ありけり。近侍の人々興じ笑ひて、「いかにもよく詠みたり」と評し合ひけるを、君聞き給ひて、「余が詠まん

本居宣長
德川時代の國學者
享和元年(一八一〇)
歿
年七十二

加納諸平
德川時代の歌人
安政四年(一八五七)
歿
年五十二

佐久良東雄
德川末期の志士
萬延元年(一八六一)
歿
年五十

志きしまりやまとこころをいふとゆは
本居宣長
士
あそひははうのうは
あそひはうのうは
あそひはうのうは

かため 花とちりはしませり
加納諸平
きみ
あそひはうのうは
あそひはうのうは
あそひはうのうは

あそひはうのうは
佐久良東雄
あそひはうのうは
あそひはうのうは
あそひはうのうは

菊池寛

文學者

明治二十二年高

松市生

戸鹿野

群馬縣利根郡沼

田町の南半里

片品川

岩代下野の國境

から南へ出る川

尾瀬沼

福島縣南會津郡

にある沼

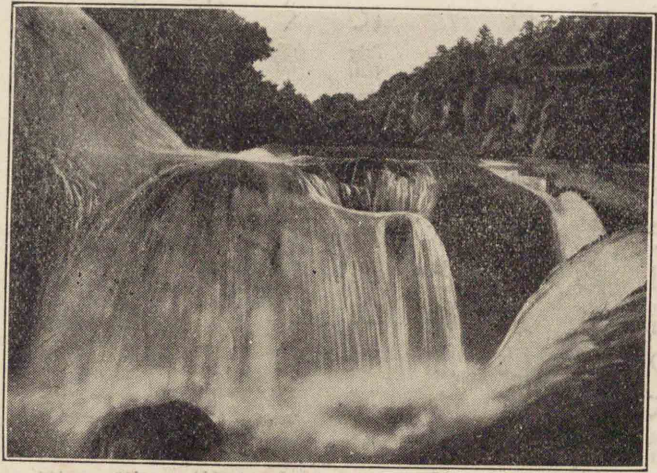
只見川の水源

二五 利根の上流を

菊池 寛

戸鹿野の橋下を過ぎた利根川は、すぐ片品川といふ可なり
大きい支流を合せる。利根の流に沿うて下る前に、暫くは
片品川を溯らう。上野と岩代との間に尾瀬沼が魔女の如
く蟠つて居る。其の邊から片品川は流れ出ると云ふ。西
に流れて十幾里、利根に合ふまで、明澄なる水流は、河床に横
たはる大岩床と絶間なき格闘を續けて行く。水勝てば水
は、鞆と勝誇り、水敗るれば水は切々たる悲鳴を揚げる。
中にも沼田から東に六里、追貝村に至つて、片品川の急流は
河床の輝石安山岩の大岩床を眞二つに劈いたる勢餘つて、
數條の瀑布と懸つて居る、所謂吹割の瀧である。と見る河

床は、急下して五丈餘の斷崖となつて居る。が、それだけで



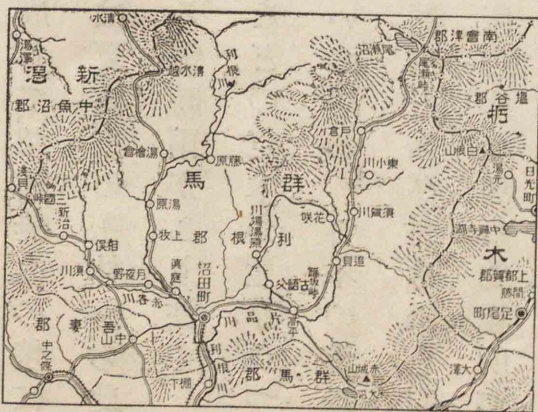
吹割の瀧

は凡ての瀑布の要件だから何の不思議もないが、この斷崖の中央には刃渡り十幾丈の大鉞を打込んだやうな大罅隙がある。片品川の水はすべて鑿々と此の裂目に吸込まれて數條の瀧と懸つて居る。轟々と渦巻く瀧壺からは冷たい水氣が湧昇つて夏服の肌寒い程である。

瀧になるまでの潺々たる優しい水聲と、鑿々として谿谷をゆるがす瀧の音と、瀧壺から流れいづる水流の響とが三様に音色を變へながら、一の諧調を成して、深谿無人の境に、不斷の「水の音楽」を奏して居る。今は夏、峽上の密林から此の音楽に伴奏するかのやう、颯々たる蟬時雨がふり注ぐ。兩岸は高い斷崖である。赤松、杉、楓などの巨木が生ひ茂つて、其の間に赤い曼珠沙華の花が咲いて居る。日本の傳説はすべての瀧壺潭、深い湖沼などを龍宮と結び付けぬと氣が済まぬらしい。木曾棧道寢覺の床近く、浦島の釣場所があるのに、駭いた旅人は、此の吹割の瀧に就いての「龍宮傳説」の奇抜さに苦笑するであらう。追貝村の草分け篠田家の祖

寢覺の床
長野縣西筑摩郡
須原・上松間の
名所

先は吹割の瀧から特別の便宜を受けて居た。それは篠田家に饗宴のある毎に前以て一寸頼んで置くと、人數に合しての飯椀・汁椀・壺などが瀧壺に浮上るのであつて、無論龍宮からの好意である。宴果てれば間違ひなく返して幾百年か過ぎた。所が今から百年ばかり前の主人が、かうして一々借りるよりもいつそ自分の物にした方が尙便利だと考へついたらしく、多く借りた椀の中で、十人前は本物を返さずに贋物を作つて返した。これ以來篠田家と龍宮と



沼田附近圖

の親類關係は絶えて、もう瀧壺にはお椀の碎片さへ浮ばなくなつた。謠曲「羽衣」の天女は「偽りは只人間にあるものを」と嘆くが、龍宮の姫君も同じ嘆聲を洩して居ることだらう。篠田家の子孫に就いて「龍宮御椀」の實物を一見するに、乾漆に似て頗る珍奇な品物だが、朱で着けた三つの鱗の紋だけが餘計ではあるまいかと思ふ。

吹割の瀧壺から出る水が、その狂はしい舞踏に疲れて一休みでもするやうに谿深く澱んで流れる上に、千歳橋と云ふのが懸つてゐる。橋上に立つと、水までは目もはるである。楓の葉が茂る兩岸に狭められて、水は油のやうに凝つて深い潭となつて居る。翡翠の色に澄渡る水底に、魚が群をな

してすい〜と動いて居る。沼田から出た會津街道は此の橋を渡つて片品川の谿谷に沿ひ、尾瀬沼の畔を過ぎて遠く岩代に入るのであるが、冬は雪に閉され、春秋とても行人は稀である。此の頃は只山間の村々の人達が、羽毛の様に眞白な繭をはち切れるほど入れた竹籠を馬の背に幾つも積んで、鈴の音に高原の静かな空氣を搖がしながら、繭賣りにと沼田の町へ急ぐのに出會ふばかりである。

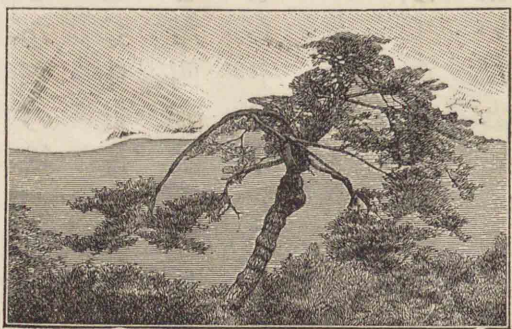
會津街道を沼田へと引返すと、片品川の流れが左手遙かに樹林の間に見渡される。利根の川岸には到る處赤松の林が多い。代赭色の赤松の梢を透かして藍色の溪流を見る。その美しさは日本風景の妙趣であらう。本多林學博士は

本多林學博士
本多靜六
東京帝國大學教
授
慶應二年(一五八)
埼玉縣生

廣重
歌川廣重
號は一立齋
浮世繪師
安政五年(一八二八)
歿
年六十二

赤城山
上野の三山の一
前橋の東北四里

數坂峠
追貝村の南二里
高平
數坂峠の西麓



駒 な つ ぎ 松

赤松は礪确の地にのみ生えるもの、赤松が生えれば國は駄目だと云ふ「赤松亡國論」を稱へられたさうだが、利根川の處處廣重風の美しい風光のため、兎も角赤松の存在を祝福したいと思つた。片品川對岸一體は赤城山の麓である。蒼茫と擴がる夏の高原に、今芳草は思ひ切り伸び、其の間を牧場森林が點綴して、見渡すかぎり青色の更紗模様の大布を敷いてひろげたやうな鮮かさである。山百合の匂ふ數坂峠を越えて高平に出ると、沼田まではもう三里、馬車がある。少年の馭

古語父
利根郡白澤村の
内

鹽原多助

文化師の人
江戸に出て炭屋
を開業し律義で
成功した

月夜野

沼田の西北二里
利根川の上流

新治村

月夜野の西北四
里

中山峠

上野國吾妻郡高
山村にある

者は喇叭高く響かせて桑園連なる高原の一筋道を一散に馬を驅る。沼田までの中途、古語父と云ふ所に鹽原多助駒つなぎの松がある。そのむかし、多助が志を立て、江戸への途中、此處へ愛馬青を繫いだのだといふ。が、月夜野からまだ西方信濃寄りの新治村に生れた多助が、江戸へ出るのなら、中山峠を越えて中山村へ出ればよい。何用があつて會津街道へうろく、差しか、つたか、これがこの傳説の奇蹟である。物識の村人は云ふ、「お前さん鹽原多助が馬を打繫いだといふのは筋道が立たねえだ。これやひやあ義經様が奥州へ下らつしやる時、此の松に馬を打繫いだといふ方が本當だよ。」兩方とも本當だらう。道端の一本松だか

ら、誰だつて馬を繫いで悪いと云ふ譯はない。(わが文藝陣)

二六 錦帶橋

五十嵐 力

五十嵐力

國文學者

文學博士

早稻田大學教授

明治七年米澤市
生

岩國

山口縣玖珂郡岩
國町

もと吉川氏の城
下

錦川

また岩國川

岩國の停車場に下りてから電車に乗つて一里餘り行くと、岩國の町につく。それから綺麗な家並の揃つた本道を十町ばかり西に行くと、道路をすぐに受けて一直線についた長い橋が見え、其の向ふに高くはないがこんもりとして風情のある山が見え、やがて橋の兩側に美しい川―錦川の名に恥ぢない實に美しい川である―が、瀬をなし淵をなし、て流れて居るのが見えて来る。この橋が名高い錦帶橋で、岩國の市街と對岸の横山村とを繋ぐべく錦川の上に架け

Kaw

山梨縣都留郡猿橋村にある桂川に架つた橋



錦 帶 橋

たものである。弓形の橋が五つ相連なつて一つの連合橋梁を成して居るのであるが、全體の長さは百二十五間、一番高い處は水面から六間餘あるといふ事である。構造は甲州の猿橋と同じだといふ事であるが、同じく名橋と云はれるものゝ、猿橋は小さいのがたゞ一つあ

るだけであり、そして渡る所は平らな土橋になつてゐて、上から見ては何等の奇もなく、横からは汽車の鐵橋や水道の橋が邪魔をして景觀を損ねて居り、唯一つ水面に近い上流の岩頭から仰ぐ眺めだけはさすがに面白いが、それも岩や水や山が穢いので興が醒めるといふ缺點がある。それに比べて、この錦帶橋は五箇連帶の規模が大きく美しい上に、山の美しさと川の綺麗さが助け合つて何とも云はれぬ美觀である。縦に一線に見ても面白く、上流や下流から横さまに五虹相連つた全面を見ても面白く、手近の大きい廣いのが段々狭く細く延長して行くのを斜に見るのも面白く、橋の上で見るのも面白く、橋下の水面から仰ぐのも面

白い。殊に山と川と町と橋と、全體を綜合して眺めると、關節の多い巨大な動物が、人里から山に移るために、蜿蜒とうねりうねつて、大川を越えて向ふの山に登らうとするかのやうで、橋全體が生きくゞして居る所に何とも云はれぬ妙趣がある。私は橋畔にたゞずんで側面から見た時に、ふとこれは前世界の巨大なる動物が大川を越す瞬間に、魔の電氣に打たれてそのまゝ動けなくなり、そして長い歲月の間に、皮や肉がすっかり腐り落ちて、弓なりの骨格だけが残つたのではないかと考へた。さう思ふと、向ふ岸に附いた西端の第一關節が其の巨大な動物の頭のやうにも見え、市街に附いた東端の關節の水平に近い一つが尾を平めたやう

にも見える。私はまた山水配合の不思議な調子で五帶の虹が同時に顯れたのではないかと考へた。何にしても世にこんな面白い橋はない、またこんな美しい橋はない。川を渡す方便としての役目からいへば、こんな無駄の多い歩きにくい橋はなからうが、美しさと、奇妙さと、生きくゞした力とから考へ、此の橋一つが眼となつて山と川と岩國全體とを活かして居る點から考へると、實に譬へやうもない味はひのある大藝術品である。錦川は流が急なため、いかに橋を架けかへても洪水毎に押流されるので、この橋は延寶元年の、今から凡そ二百五十年前に城主吉川廣嘉が多年苦心の結果、自ら工夫して、設計を立て、架設させたものだ

延寶元年
後西院天皇の御
代(二三三)

日本一

日本一 日本一

といふ。私は彼が美しい天地にこの大存在を加へて、活きた土地を更に活かし、美しい國を更に美しくした手柄に對して限なき感謝を捧げたいと思ふ。

私はこの錦帯橋・五虹橋・龍骨橋、今にも動き出しさうな巨獸渡川橋の美にすつかり打たれてしまつた。そしてそこそこに川向ひの吉香公園を見、更にそこへに繪葉書や岩國縮などの記念品を買ひと、のへ、目先にちらつく不思議な橋の幻を大切に護つて車上の人となつた。(甲島園隨筆)

新村出
言語學者
文學博士
京都帝國大學教
授
明治七年靜岡縣
生

二七 日本一

新村出

いつの時代にも一種の流行語といふものがあつて、其の時

代の反映を成して居る。吾等が幼き耳に慈母から聞いたお伽話の中にある日本一の黍團子や、日本一の花咲爺などいふ場合に使はれた日本一の語も、其の起源を探つて見ると、やはり一時代の流行語として廣く用ひられた語で、確かに其の時代の國民精神を表現してをるのである。尤も日本一などといふ褒め詞は、いかなる時代にも誰でも自らこしらへて使ひ得る詞には相違ないけれども、それが一時代に非常に流行して居るのを見て、其の當時の國民の思潮がいかに高まり、上下の元氣がいかに壮んであつたらうと想像されるのである。日本一といふ形容語は足利時代より徳川時代の初期へかけてのはやりことばと自

すべて人には
清少納言の語
枕草紙に出て居
る
濱松中納言物語
菅原孝標女が著
した小説
大鏡
文徳天皇から後
一條天皇まで百
七十餘年の歴史
を假名交り文で
記したもの
平治物語
平治の亂の始末
を記した軍記
平家物語
平家の興亡を記
した軍記

分は認めるが、其の以前にも用ひられなかつたのではない。優にやさしき平安朝の宮廷裡の婦人でさへ、きかぬ氣のものであると、すべて人には一に思はれずばさらに何かせん、二三にては死ぬともあらじ、一にてをあらん、などいふ位の見識があつたのだから、日本一といふほどの考がないわけはあるまい。濱松中納言物語、大鏡などにも、はや「日本一」「日本第一」といふ賞美語がいづれも二ヶ處ほどに見える。又下つて鎌倉時代になると、平治物語や平家物語の如き軍記物には「日本一の不覺人」とか、「日本一の剛の者」とかいふ文句があり、當時代の初期の文書には「日本第一の天狗」と出てくるので、段々廣く用ひられて來たやうである。然し足

曾我物語
曾我兄弟仇討の
物語
義經記
源義經の一代記

利時代になると、この俗語は益々頻繁に用ひられ、又其の意味も頗る擴張されてをるのである。曾我物語には「日本一のふかく人」といふ句が出てをるが、義經記になると、數個處に見えてある。例へば靜御前を讚美して「舞においては日本一にて候」といひ、「日本一といふ宣旨を賜はりけると承り候ひし」といひ、又常盤御前の容色の美しきを「日本一の美人なり」と稱へるやうに、最上級の讚美言としてあちこちに使はれてをる。謠曲などに「日本一の御機嫌にて候」（小袖曾我）「それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ」（鉢木）「日本一烏帽子が似合ひ申して候。」（烏帽子折）などの使ひざまになる。といかにこの語が流行したか、わかり、従つて意味が大分

筆蹟
御前にて物語な
どするついでに
も。すべて人に
は。一におもはれ
ずば更に何にか
せん。たゞいみ
じうにくまれ。
あしうせられで
あらん。二三に
ては死ぬともあ
らじ。一にてを
あらむなどいへ
ば。一乗の法なり
と。人々わらふ
事のすぢなめり。
(枕草子の一節)

擴がつて來たことが知れる。丁度同じ頃であらう、御伽話
に黍團子をほめても「日本一」といひ、花咲爺をほめても「日本

一」といひ、むやみにこの語を使つてをる。謠曲で用ひてあ
る以上は、狂言の上にあるのは當然の話で、「日本一の下手」と
いひ、「日本一の大小」と見える。要するに足利時代は國
民の元氣の大きいに勃興した時代である。韓國や支那の沿

岸を荒しまはつて、所謂倭寇を試みた時代である。高麗及
び朝鮮との交際や、明との交通も盛であつた時代である。
末期になると、西洋や南洋との交通も開けたし、對外精神の
發展は遂に征韓の擧を起さしめるやうになつたのである。
此の如く外に向つて大いに膨脹し、侵略し、飛躍せんとする
の元氣を持つて居た當時の我が國民は、内に在つては常に
覇者たらんとする氣概を有し、清女のいはゆる「一に思はれ
ずば、更に何にかせん。」の意氣を持ち、日本一、天下一、三國一た
らんずる心掛があつたものと思はれる。

徳川時代は鎖國時代、封建割據時代である、國民精神の萎靡
時代である。立派な覇者が唯一人江戸に構へて御座つた

清女
清少納言

時代である。この征夷大將軍が即ち天下一であり、日本一であつたのである。當代の民衆は將軍の威光を謳歌しつゝ「日光を見ないうちに結構といふな」といつた。日本一のかはりに寧ろ日光一といふ語でも出來さうなものであつたと思ふ。しかし、徳川氏の初期に日本一の語が流行つたことは、葡萄牙人のかいた日本文典の中に、形容詞の最上級として此の語を天下一といふ語と共に擧げて、「彼奴は日本一大けなげ者ぢや」、「天下一の學者である」などの例を示してゐるのでも知れよう。當時流行の俳諧でも、月花を賞めるには猶往々この語を用ひ、「唐までも日本一の月夜かな」、「名木の花ぞ日本一の谷」などとやつてゐる。かの「醒睡笑」にも、「や

唐までも
松江重頼の句
名木の
服部常春の句
醒睡笑
元祿時代に出來
た輕口囃の本

れ、日本一の鈍なる弟子」とか、「われは日本一の事をたくみ出したは」とか、「紙は日本一の播磨杉原」とか見えるので、一般の事が推される。

さて足利時代には、獨り日本一のみならず、すべて「何々一」といふことがはやつたもので、坂東一・西國一・中國一・西塔一、なほ進んでは天下一・三國一などの語がある。天下第一の稱は既に漢籍にも見えてゐるのであるが、我が足利時代中葉の抄本にも見え、以後の軍記及び俗文學にも非常に多く使はれてゐる稱號である。この稱は大抵藝術界の優勝者、即ちチャンピオンといふやうな意味で、一種の尊稱である。従つて俳諧にこの名が甚だ多く見え、月花を愛でるにも、や

西塔
比叡山延曆寺の
西塔

チャンピオン
Champion

天和二年
靈元天皇の御世
將軍德川綱吉時
代(二三四)

元祿
東山天皇の御世
將軍德川綱吉の
盛時
(二三六—二三三)

たら天下一、天下一といつたものである。かくの如く流行した結果、あまり濫用も濫用し過ぎたので、遂に天和二年に、器物に天下一の字を記すことを禁ぜられた。一體時代からいへば天下一の將軍の下に、むやみに天下一などと稱するのは不都合の至なのであらう。天和二年といへば元祿の少し前で、はや大分徳川時代の風潮が變つて來た。これで全く廢れたのではないが、戰國時代に流行しはじめた語が太平の時代に衰へるのも、言語の運命上然るべき話だ。天下一に次いで、三國一といふ語が、やはり同時代に流行つたものである。これも、始は廣く用ひられた賞美語であるが、月雪花を愛でたり、美人をほめたりするほか、最も多く

は嫁入や婿取の場合の祝辭に用ひられた。狂言に花子の姿の美なるを稱へて「天竺・震旦・我が朝三國一ぢやよの」といひ、秀句好きなるを「唐土・天竺・我が朝三國に隠れがおりない」と形容したり、醒睡笑に「老僧のはたらき三國一」などといつたりする。後世は嫁入・婿取か、さもなくば甘酒屋の看板に名残を留めてあつて、現今も、天下一などの美稱と共に國産物などには記してあるのを折々見うけるが、まづこゝらが結末であらう。三國といへば昔は日本・支那・印度・朝鮮は一國とは已に見做されなかつたであつたものが、今は露佛獨とか日英米とかいふ工合に變つたのだから、右のやうな始末になるのも、あたりまへの話である。

日本一を始め、これらの語はみな足利時代からの流行語であつたが、時勢の變遷と共に段々すたれてしまつた。まあこれからは世界一といふ語か、さもなければ「日本で第一」といふ意味でなく、「日本が第一」といふ意味で、日本一といふ語をはやらせねばなるまい。(南蠻記)

二八 厨子王

森 林 太 郎

森林太郎
號は鴨外
文學者
醫學者
文學博士
醫學博士
陸軍軍醫總監
帝室博物館總長
石見國津和野藩の生
大正十一年薨
年六十一

安壽は山の頂に立つて、南の方をじつと見てゐる。目は、石浦を経て由良の港に注ぐ大雲川の上流を辿つて、一里ばかり隔つた川向に、こんもりと茂つた木立の中から、塔の尖の見える中山に止つた。そして「厨子王や」と弟を呼びかけた。

石浦
丹後國加佐郡由良町字石浦
山椒大夫の屋敷跡といふがある
由良の湊
舞鶴と宮津の中間にある小港
大雲川
由良川ともいふ
福知山の方から來て由良の港に注ぐ
中山
大雲川の右岸
由良の南一里

「わたしが久しい前から考へ事をしてゐて、お前ともいつもの様に話をしないのを變だと思つてゐたでせうね。もうけふは柴なんぞは刈らなくても好いから、わたしの言ふ事を好くお聞き。あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし、引返して佐渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれませ。おかあ様と御一しよに岩代を出てから、わたしどもは恐しい人にばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて、此の土地を逃げ延びて、どうぞ都へ上つておくれ。神佛のお導きで、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りにな

も刈りませう。さあ、あそこまでおりて行つて、籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送つて上げよう。」
かう云つて安壽は先に立つておりて行く。

厨子王はなんとも思ひ定めかねて、ぼんやりして附いておる。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早くおとなびて、その上ものに憑かれたやうに、聴く賢しくなつてゐるので、厨子王は姉の詞に背くことが出来ぬのである。

木立の處までおりて、二人は籠と鎌を落葉の上に置いた。姉は守本尊を取出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが、今度逢ふまでお前に預けます。此の地藏様

をわたしたと思つて、護刀と一しよにして、大事に持つてゐておくれ。」

「でも、ねえさんにお守がなくては。」

「いゝえ。わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないときつと討手が掛ります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行つては、追附かれるに極つてゐます。さつき見た川の上手を和江と云ふ處まで往つて、首尾好く人に見附けられずに、向河岸へ越してしまへば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えるてゐたお寺に這入つて隠しておもらひ。暫くあそこに隠れてゐて、討手が歸つて來たあとで寺を逃げてお出。」

和江
大雲川の左岸中
山の向ひ
由良の南一里

「でもお寺の坊さんが隠して置いてくれるでせうか。」
「さあ、それが運だめしだよ。開ける運なら、坊さんがお前を隠してくれませう。」

「さうですね。ねえさんの今日おつしやる事は、まるで神様か佛様がおつしやるやうです。わたしは考を極めました。なんでもねえさんのおつしやる通にします。」

「おう、好く聽いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隠してくれます。」

「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げて都へも往かれます。おとう様やおかあ様にも逢はれます。ねえさんのお迎にも來られます。」

厨子王の目が姉と同じ様に輝いて來た。

「さあ、麓まで一しよに行くから、早くお出。」

二人は急いで山をおりた。足の運びも前とは違つて、姉の熱した心持が、暗示のやうに弟に移つて行つたかと思はれる。

泉の湧く處へ來た。姉は櫛子に添へてある木の椀を出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」かう云つて一口飲んで弟にさした。

弟は椀を飲みほした。「そんならねえさん。御機嫌好う。きつと人に見附からずに、中山まで參ります。」

厨子王は十歩ばかり残つてゐた坂道を、一走りに駆けおり

て、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向つて急ぐのである。

安壽は泉の畔に立つて、並木の松に隠れては又現れる後影を小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近づくのに、山に登らうともしない。幸に今日は此の方角の山で木を樵る人がないと見えて、坂道に立つて時を過す安壽を見咎めるものもなかつた。

後に同胞を捜しに出た山椒大夫一家の討手が、此の坂の下の沼の端で小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履であつた。

國分寺
 中山にあつたと
 いふ
 山椒大夫
 由良の石浦に
 た長者
 五子のうち三郎
 が最も暴戻であ
 つた

中山の國分寺の三門に、松明の火影が亂れて、大勢の人が籠み入つて来る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挾んだ山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲に云つた。「これへ參つたのは石浦の山椒大夫が族のものぢや。大夫が使ふ奴の一人が此の山に逃込んだのを、たしかに認めたものがある。隠れ場は寺内より外にはない。すぐにこゝへ出して貰はう。」

附いて來た大勢が、「さあ出して貰はう、出して貰はう。」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。其の石の上には、今手に手に松明を持つた三郎の手のものが押合

つてゐる。又石疊の兩側には、境内に住んでゐる限の僧俗が、殆ど一人も残らず簇つてゐる。これは討手の群が門外で騒いだ時、内陣からも、庫裡からも、何事が起つたかと怪んで出て來たのである。

初め討手が門外から門を開けいと叫んだ時、開けて入れたら亂暴をせられはしまいかと心配して、開けまいとした僧侶が多かつた。それを住持曇猛律師が開けさせた。併し今、三郎が大聲で逃げた奴を出せと云ふのに、本堂は戸を閉ぢた儘、暫くの間ひつそりしてゐる。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰返した。手のものの中から和尚さん、どうしたのだ。と呼ぶものがある。それに

短い笑聲が交る。

やう／＼の事で本堂の戸が靜かに開いた。曇猛律師が自分で開けたのである。律師は偏衫一つ身に纏つて、なんの威儀をも繕はず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い巖疊な體と眉のまだ黒い廉張つた顔とが、搖めく火に照し出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。

律師は徐ろに口を開いた。騒がしい討手の者も、律師の姿を見ただけで黙つたので、聲は隅々まで聞えた。「逃げた下人を捜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしに言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは當山に

みぬ。それはそれとして、夜陰に劔戟を執つて、多人數押寄せ、せて參られ、三門を開けといはれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たかと思つて、三門を開けさせた。それになんぢや。御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。こゝで狼藉を働かされると、國守は檢校の責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうやも知れぬ。そこを好う思つて見て、早う引取られたが好からう。悪い事は言はぬ。お身達のためぢや。」かういつて、律師はしづかに戸を締めた。

三郎は本堂の戸を睨んで齒咬をした。併し戸を打破つて踏込むだけの勇氣もなかつた。手のものどもは唯風に木葉のざわつくやうに囁きかはしてゐる。此の時大聲で叫ぶものがあつた。「その逃げたといふのは、十二三の小わつばぢやらう。それならわしが知つてゐる。」三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まがふやうな親爺で、此の寺の鐘樓守である。親爺は詞を續いていつた。「そのわつばはな、わしが午頃鐘樓から見てゐると、築泥の外を通つて南へ急いだ。かよわいかはりには身が軽い。もう大分の道を行つたぢやろ。」

「それぢや。半日に童の行く道は知れたものぢや。續け。」

といつて三郎は取つて返した。

松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やうやう落着いて寝ようとした鴉が二三羽、又驚いて飛立つた。

田邊
今の丹後國加佐郡舞鶴町

あくる日に國分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安壽の入水の事を聞いて來た。南の方へ往つたものは、三郎の率ゐた討手が田邊まで往つて引返した事を聞いて來た。

中二日置いて、曇猛律師が田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の受糧器を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐ

る。跡からは頭を剃りこくつて三衣を着た厨子王が附いて行く。

朱雀野
京都市の西部
昔の朱雀大路

二人は眞晝に街道を歩いて、夜は處々の寺に泊つた。山城の朱雀野に來て、律師は權現堂で休んで、厨子王に別れた。「守本尊を大切にしていって、往け、父母の消息はきつと知れる。」と言聞かせて、律師は踵を旋した。亡くなつた姉と同じ事を言ふ坊様だと、厨子王は思つた。

清水寺
京都市の東山にある寺
本尊は觀音

都に上つた厨子王は、僧形になつてゐるので東山の清水寺に泊つた。

籠堂に寝て、あくる朝目が覺めると、直衣に烏帽子を着て指貫を穿いた老人が枕元に立つてゐて云つた。「お前は誰の

子ぢや。何か大切な物を持つてゐるなら、どうぞ己おれに見せてくれい。己は娘の病氣の平癒を祈るために、ゆふべこゝに參籠した。すると夢にお告があつた。左の格子に寝てゐる童が好い守本尊を持つてゐる。それを借りて拜ませいといふ事ぢや。けさ左の格子に来て見れば、お前がある。どうぞ己に身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。己は關白師實ぢや。」

厨子王はいつた。「わたくしは陸奥掾正氏といふものゝ子でございます。父は十二年前筑紫の安樂寺へ往つたきり歸らぬさうでございます。母は其の年に生れたわたくしと三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡しんぶぐんに住むことにな

師實
關白太政大臣藤原師實
後三條堀河兩帝に仕へた
康和三年(七九二)薨
年六十一
安樂寺
古筑前國筑紫郡宰府町太宰府神社の地にあつた

りました。そのうちわたくしがだいぶ大きくなつたので、姉とわたくしを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐しい人買に取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしは丹後の由良へ賣られました。姉は由良でなくなりました。わたくしの持つてゐる守本尊は此の地藏様でございます。かう云つて守本尊を出して見せた。

師實は佛像を手に取つて、先づ額に當てるやうにして禮をしました。それから面背を打返しく、丁寧に見ていつた。「これはかねて聞及んだ尊い放光地藏菩薩の金像ぢや。百濟國から渡つたのを、高見王が持佛にしておいでなされた。これを持ち傳へてをるからは、お前の家柄に紛れはない。

高見王
桓武天皇の皇子
葛原親王の王子
平氏の祖

永保
白河天皇の御世
(981-984)

仙洞がまだ御位にをらせられた永保の初に、國守の違格に連坐して筑紫へ左遷された平正氏が嫡子に相違あるまい。



森 林 太 郎
若し還俗の望があるなら、追つては受領の御沙汰もあらう。先づ當分は已の家の客にする。己と一しよに館へ來い。」

師實は厨子王に還俗させて、自分で冠を加へた。同時に正氏が謫所へ、赦免状を持たせて、安否を問ひに使を遣つた。

併し此の使が往つた時は正氏はもう死んでゐた。元服して正道と名告つてゐる厨子王は身の糞れる程歎いた。

其の年の秋の除目に正道は丹後の國守にせられた。國守は最初の政として、丹後一國で人の賣買を禁じた。そこで山椒大夫も悉く奴婢を解放して、給料を拂ふことにした。大夫の家では一時それを大きい損失のやうに思つたが、此の時から農作も工匠の業も前に増して盛になつて、一族はいよゝ富み榮えた。國守の恩人曇猛律師は僧都にせられ、安壽が亡き迹は懇に弔はれ、又入水した沼の畔には尼寺が立つことになつた。

假寧
官吏に賜ふ休暇

正道は任國のためにこれだけの事をして置いて、特に假寧

雜太
佐渡國雜太郡
今は佐渡郡雜太
郷
佐渡島の中部國
府川のほとりで
あらう

を申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。
佐渡の國府は雜太と云ふ所にある。正道はそこへ往つて、
役人の手で國中を調べて貰つたが、母の行方は容易に知れ
なかつた。
或日正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩い
た。そのうちいつか人家の立並んだ所を離れて、畑中の道
に掛つた。空は好く晴れて日があかくと照つてゐる。
正道は心の中に、どうしておかあ様の行方が知れないのだ
らう、若し役人なんぞに調べさせて、自分が捜し歩かぬのを
神佛が憎んで逢はせて下さらないのではあるまいか、など
と思ひながら歩いてゐる。ふと見れば、だいぶ大きい百姓

家がある。家の南側の疎な生垣の内が、土を敲き固めた廣
場になつてゐて、其の上に一面に蓆が敷いてある。蓆には
刈取つた粟の穂が干してある。その真中に、襪樓を着た女
がすわつて、手に長い竿を持つて、雀の來て啄むのを逐つて
ゐる。女は何やら歌のやうな調子でつぶやく。
正道はなぜか知らず、此の女に心が牽かれて、立止まつて覗
いた。女の亂れた髪は塵に塗れてゐる。顔を見れば盲で
ある。正道はひどくあはれに思つた。そのうち女のつぶ
やいてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞分けられて來た。そ
れと同時に正道は瘡病のやうに身内が震つて、目には涙が
湧いて來た。女はかういふ詞を繰返してつぶやいてゐた

のである。

安壽戀しや、ほうやれほ。

厨子王戀しや、ほうやれほ。

鳥も生あるものなれば、

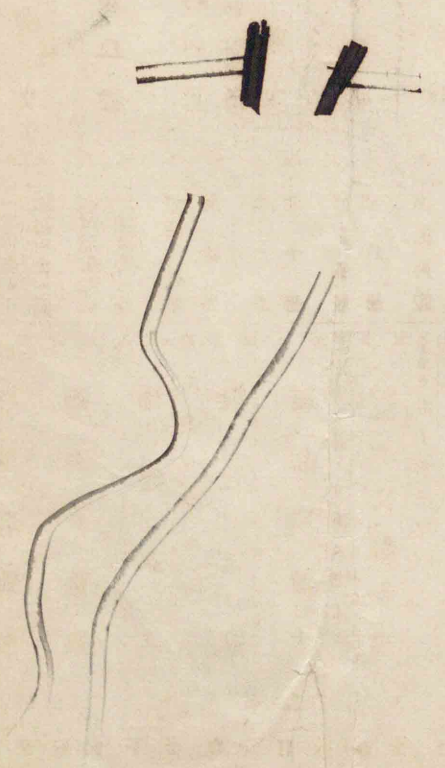
疾うく逃げよ、逐はずとも。

正道はうつとりとなつて、此の詞に聞惚れた。そのうち臍が煮え返るやうになつて、獣めいた叫が口から出ようとするのを、齒を食ひしばつてこらへた。忽ち正道は縛られた繩が解けたやうに垣の内へ駈込んだ。そして足には粟の穂を踏散らしつゝ、女の前に俯伏した。右の手に守本尊を捧り持つて、俯伏した時に、それを額に押當てゝゐた。女

は雀でない、大きいものが粟をあらしに來たのを知つた。そしていつもの詞を唱へ罷めて、見えぬ目でじつと前を見た。其の時干した貝が水にほとびるやうに、兩方の目に潤ひが出た。女は目が開いた。「厨子王」と云ふ叫が女の口から出た。二人はびつたり抱合つた。(鷗外全集)

師範學校 中學校 實業學校
各學教科用書

師範國文 東京高等師範學校教授 吉田彌平編 一部用全十册 二部用全一册	師範國文教科書 東京高等師範學校教授 吉田彌平編 本科用全六册 二部用全一册	中學校國文教科書 東京高等師範學校教授 文部博士 高野辰之編 修正十七版	實業學校國文讀本 東京高等師範學校教授 文部博士 保科孝一編 初十册	實業學校國語教科書 東京高等師範學校教授 文部博士 吉田彌平・小山左文二共著 修正五版	師範國文 東京高等師範學校教授 文部博士 吉田彌平編 修正再版	國文法網要 東京高等師範學校教授 吉田彌平著 修正再版	中學校日本文典 東京高等師範學校教授 吉田彌平編 修正九版	風館編輯所編 修正六版	明簡日本文典 東京高等師範學校教授 吉田彌平編 修正五版	現代文新鈔 東京高等師範學校教授 吉田彌平編 修正五版
近世文新鈔 全訂正一册	近古文新鈔 全訂正二册	增鏡鈔本 全訂正一册	現代文鑒 全訂正二册	徒然草鈔本 全訂正三册	漢文教科書 東京高等師範學校教授 文部博士 中村久四郎編 修正八版	漢文教科書 東京高等師範學校教授 文部博士 井上哲次郎編 修正四版	子女漢文教科書 東京高等師範學校教授 文部博士 兒島猷吉郎編 修正四版	日本外史鈔本 全修正一册	十八史略鈔本 全修正一册	論孟鈔本 全修正一册

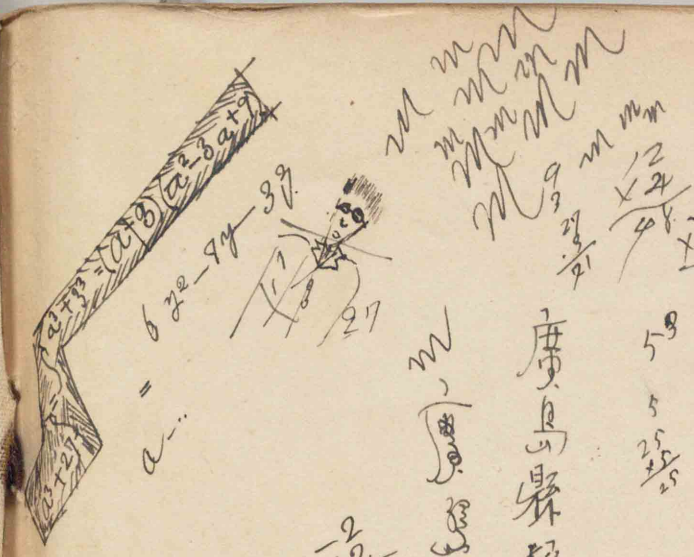


Vertical handwritten notes on the left edge of the left page, including the character '藤' (Fuji) and various scribbles.



廣島縣 比波郡 山東村 三百三

Handwritten notes and scribbles on the left side of the right page, including the character '藤'.



$(m+n) = m + 2n + n$

廣島縣 比波郡 山東村

Handwritten mathematical calculations: $3 \times 3/9$, $2 \times 2/4$, $4 \times 4/16$, $6 \times 6/36$, $8 \times 8/64$.

廣島縣 比波郡 山東村

字三丁目

廣島縣 比波郡 山東村

比波郡 山東村

Handwritten mathematical calculations: $5 \times 5/25$, $6 \times 6/36$, $9 \times 9/81$, $12 \times 12/144$, $4 \times 4/16$.

Handwritten scribbles at the bottom of the right page.

172-1325B

第貳學子年第參學

藤谷



Kakache
中辛校
fujitani

広島大学図書

2000302013



庫
26
13